— 茨城県土浦市 —

# 中　根　遺　跡

店舗建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

有限会社ヤマダイ商事
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

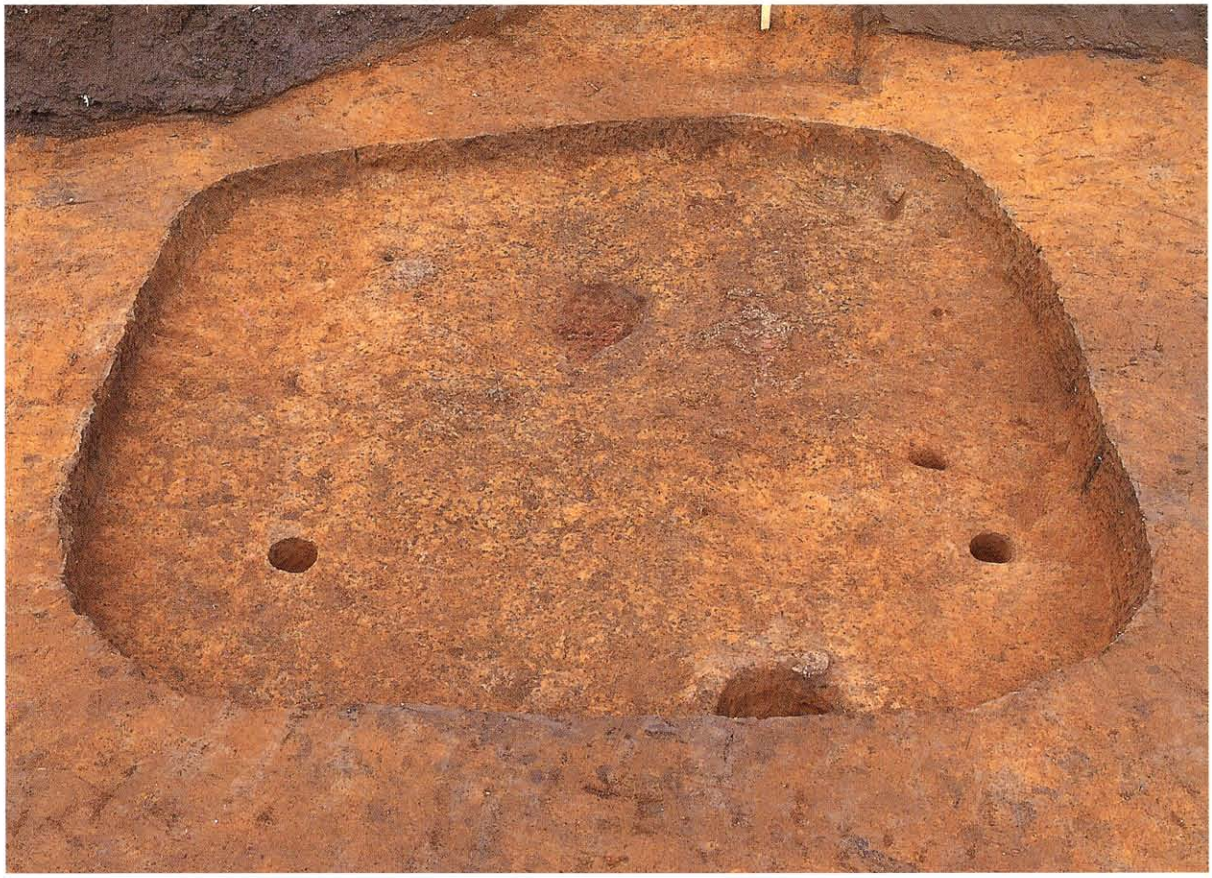
— 茨城県土浦市 —

# 中根遺跡（なかねいせき）

店舗建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

有限会社ヤマダイ商事
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会



1号住居跡

3号住居跡出土壺

# 序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳などの遺跡が数多く存在しています。遺跡は当時の人々の生活や環境などを知る手がかりとなり、また、現代に生きる我々が、豊かな生活を送ることができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためには重要なことです。

この度、有限会社ヤマダイ商事の店舗建設に伴い、中根遺跡の一部について記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の成果は本文に記載されているとおりですが、土浦市における古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、有限会社ヤマダイ商事をはじめ、関係者の皆様のご協力とご支援に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成21年10月

土浦市教育委員会
教育長　冨永　善文

# 例　　言

1．本書は土浦市右籾字中根1461－2番地他に所在する、中根遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は有限会社ヤマダイ商事の委託を受け、土浦市遺跡調査会（会長須田直之）が実施した。
3．調査期間は1997(平成9)年3月25日から4月10日である。その後整理作業を行った。
4．発掘調査は関口満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当し、当館学芸員（石川功、黒澤春彦、比毛君男）が補佐した。整理は福田礼子（当館臨時職員）が担当した。
5．本書の編集は福田と黒澤が行ない、関口が補佐した。
6．本書の執筆は第1章・第5章を黒澤、第2章第2節を加藤寛生（土浦市遺跡調査会調査補助員）と黒澤、第2章第1節、第3章、第4章、第6章を福田が行なった。
7．整理作業は、遺物実測から図版作成を福田・加藤、遺物写真撮影を黒澤がおこなった。
8．調査及び報告書作成には下記の諸機関・方々よりご協力・ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
有限会社ヤマダイ商事　茨城県教育庁文化課　塚原悦男　窪田恵一　関口友紀　中野耕太郎　藤野一之
9．本遺跡の出土品、報告書作成に伴う資料は全て上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

# 凡　　例

1．中根遺跡の記号は「右籾所在の中根遺跡」からMNとした。
2．遺構図中の断面図・土層図脇の数値は海抜高を表し、単位はmである。
3．遺構図中で、スクリントーンは焼土、一点鎖線は硬化面、破線は推定線を表す。
4．遺物実測図で、スクリントーンは赤彩、中心線が一点鎖線のものは回転（復元）実測を表す。
5．土層観察・遺物色調における色相の判断は『新版　標準土色帖』（日本色研事株式会社）を使用した。
6．遺構図中の土器を結ぶ実線は接合関係を示す。
7．遺構・遺物の縮尺は原則として下記の通りである。その他の場合も図に明記してある。
遺構－住居跡：1／60・1／30（炉・Pit）　遺物－土器：1／3　溝：1／100・1／40　土製品：1／2
8．本文・表中の（　）は現存値、［　］は推定値を表す。

# 調 査 者 名 簿

**発掘調査**

| | |
|---|---|
| **主任調査員** | 関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員） |
| **調査補助員** | 加藤寛生（国学院大学学生）　若松亮太（筑波大学学生） |
| **調査作業員** | 塚田まさ　小野寺悦子　小野寺奈央　田上純子　飯田志満子　小柳道雄 |

**整　　理**

| | |
|---|---|
| **調 査 員** | 福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）　黒澤春彦　関口　満 |
| **調査補助員** | 加藤寛生 |
| **整理作業員** | 大坪美知子 |
| **事　　務** | 鈴木ひと美 |

# 土浦市遺跡調査会組織（平成８・９年度）

**会　長**　須田直之　土浦市文化財保護審議会長
**副会長**　尾見彰一　土浦市教育委員会教育長
**理　事**　大塚　博　土浦市文化財保護審議会委員／廣田宣治　土浦市参事兼企画調整課長／
五頭英明　同企画調整課長／内海崎保生・出地隆治　同区画整理課長／
坂入　勇　同建築指導課長／野口幹雄・石神進一　同都市計画課長／
金塚文雄・細田俊雄　同耕地課長／　大塚重治・内海崎保生　同土木課長
**監　事**　中川茂男　土浦市教育委員会教育次長
小野政夫　同監査事務局長
**幹事長**　宮本　昭　土浦市教育委員会文化課長
**幹　事**　矢口俊則　上高津貝塚ふるさと歴史の広場副館長／萩島　優　当市教育委員会文化課課長補佐／
小貫俊男　同主査兼文化財係長／榎　陽介・塩谷　修・石川　功・黒澤春彦・
関口　満（事務・出納担当）・橋場君男　上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員／
宮本礼子　当歴史の広場・市教育委員会文化課学芸員／中澤達也　当市教育委員会文化課学芸員

# 目　　次


口絵
序
例言　凡例　調査者名簿
土浦市遺跡調査会組織
目次　挿図目次　写真図版目次
第１章　調査の経緯と経過……１
第２章　環境
　第１節　地理的環境……３
　第２節　歴史的環境……３
第３章　調査の概要……６
第４章　遺構と遺物……８
第５章　総括……19
第６章　おわりに……23
報告書抄録……24
写真図版


# 挿図目次


第１図　遺跡周辺地形図……２
第２図　周辺の遺跡……４
第３図　基本層序……６
第４図　調査区全体図……７
第５図　１号住居跡出土遺物……８
第６図　１号住居跡……９
第７図　２号住居跡出土遺物……10
第８図　２号住居跡……11
第９図　３号住居跡……13
第10図　３号住居跡出土遺物……14
第11図　４号住居跡……15
第12図　４号住居跡出土遺物……15
第13図　１号溝出土遺物……16
第14図　１号溝　２号溝……17
第15図　遺構外出土遺物……18
第16図　花室川下流域の
　弥生時代・古墳時代前期集落跡……21


# 写真図版目次


PL.1　調査前状況　調査終了全景
PL.2　１号住居跡完掘　１号住居跡遺物出土状況
　２号住居跡完掘
PL.3　３号住居跡完掘　３号住居跡遺物出土状況
PL.4　４号住居跡完掘　１号溝完掘　２号溝完掘
PL.5　出土遺物

# 第１章　調査の経緯と経過

1996(平成８)年12月、事業者である有限会社ヤマダイ商事より、市内右籾字中根1641－２外で計画している開発行為の事前協議申請書が提出された。申請地は周辺を含め周知の遺跡ではない場所であった。土浦市教育委員会（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）で現地踏査を行なったところ、土師器など土器の散布がみられ、また、樹枝状に延びた谷津に面した台地上であるため、地形から見ても遺跡の存在する可能性が考えられると判断した。

翌1997(平成９)年２月25日、事業者の協力を得て、遺跡の有無や、遺跡が確認された場合の密度や性格等を把握するために試掘確認調査を行なった。その結果、申請地の一部で住居跡が確認され、弥生時代から古墳時代の集落跡であることが判明した。新発見の遺跡のため字名から「中根遺跡」と命名し、２月26日付けで遺跡発見の通知（文保法第57条の６）を文化庁長官宛に提出した。

その後、試掘確認調査の結果をもとに事業者と協議を行なったが、現状保存が困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。２月下旬、事業者から埋蔵文化財発掘の届出（文保法第57条の２）が提出され、３月１日付けで文化庁長官宛に進達した。発掘調査は土浦市遺跡調査会（会長　須田直之）が行なうこととなり、３月22日に両者で契約を締結した。埋蔵文化財発掘調査の報告（文保法第98条の２）は、３月26日付けで文化庁長官宛に提出した。

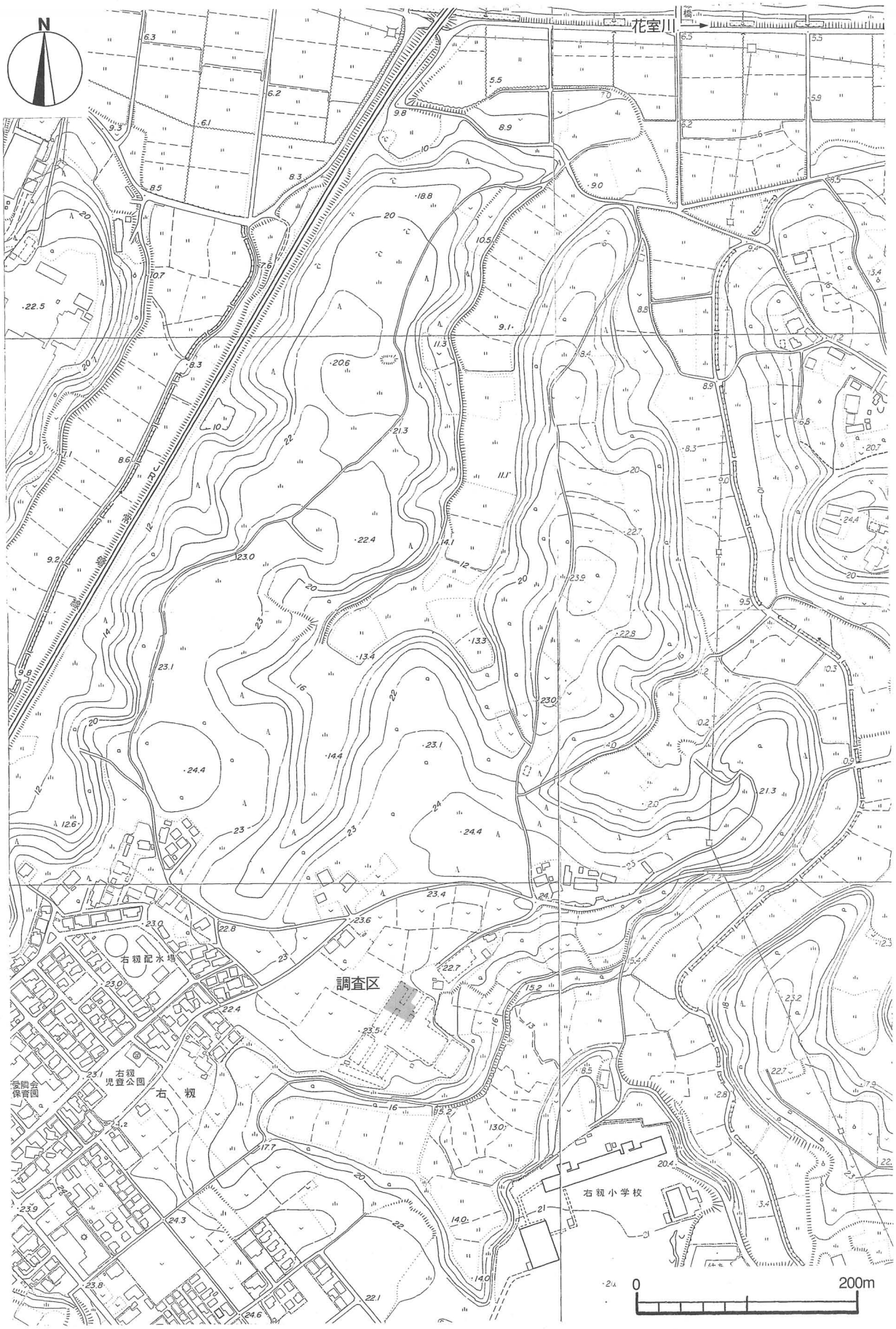
発掘調査は上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員の関口満が担当し、当館学芸員や臨時職員が補佐した。調査日数は11日で、経過は以下の通りである。

1997(平成９)年

３月25日　表土除去と器材搬入を行なう。
３月26日　本日から作業員を入れた調査となる。遺構確認後、１号溝検出開始。
３月29日　１号溝完掘。１号住居跡検出開始。
４月１日　３号住居跡検出開始。
４月２日　１号住居跡遺物取り上げ。
４月４日　１号住居跡、２号溝完掘。
　　３号住居跡遺物取り上げ。
４月８日　２号住居跡検出開始。
４月９日　３号住居跡完掘。
４月10日　２号住居跡、４号住居跡完掘。
　　調査終了写真撮影。
　　発掘調査が終了し器材を撤収する。

調査終了後の４月17日付けで、土浦市遺跡調査会から提出された埋蔵物発見届を土浦警察署長宛に、発掘調査終了確認依頼を県教育長宛に進達した。

作業風景




第１図　遺跡周辺地形図（１／5,000：1990年）

# 第2章　環　　境

## 第1節　地理的環境

本遺跡が所在する土浦市は茨城県南部に位置している。土浦市は東に霞ヶ浦、北西に筑波山を望み市内中央を流れる桜川により形成された低地を中心として発展してきた都市である。この低地の北部は新治台地、南部は筑波稲敷台地と呼ばれ、土浦市はこれら低地と台地により構成されている。筑波稲敷台地の北側には霞ヶ浦へと注ぐ花室川が流れており、これによって河川沿岸の台地両側は複雑に開析され、狭い谷津と小規模の台地が数多く形成されている。土浦市域に当たる下流域の台地は、標高23～25mで低地との比高差は約18～20mである。本遺跡は、この花室川右岸の小規模な台地上、標高約24mに位置している。表土は30cm前後で、その下にソフトローム層、ハードローム層が堆積している。ローム層は2m前後である。

## 第2節　歴史的環境

中根遺跡の位置する花室川水系の台地上には、旧石器時代からの遺跡が多数存在している。ここでは中根遺跡周辺に分布する主な遺跡を時代ごとに概観することとする。

旧石器時代の遺跡としては、右岸に宮前遺跡（45）、向原遺跡（32）などがあり、向原遺跡からは黒曜石のブロックが検出されている。左岸の和台遺跡（3）、永国遺跡（5）、阿ら地遺跡（6）、内出後遺跡（13）からはナイフ形石器が出土した。また、この流域はナウマン象の化石が発見されることで知られている。

縄文時代の遺跡は多く、早期では右岸に形部遺跡（47）、南丘遺跡（69）、内路地台遺跡（54）などがあり、左岸には永国遺跡、阿ら地遺跡などがある。内路地台遺跡からは炉穴が検出された。前期の遺跡は、右岸に権現前遺跡（44）、右籾貝塚東遺跡（46）、形部遺跡など、左岸には内出後遺跡、神出遺跡（15）などがある。権現前遺跡と形部遺跡からは、市内での検出例の少ない浮島式期の住居跡が検出され、内出後遺跡からは石製の抉状耳飾りが出土した。貝塚では関山式期の烏山貝塚（65）がある。中期の遺跡は谷津の奥に多く、宮前遺跡、扇ノ台遺跡（37）、摩利山遺跡（41）のように大形土坑を伴う大規模な集落がみられる。左岸の和台遺跡からは長軸10mを越える大形の住居跡が検出された。後期の遺跡としては峰崎遺跡群（40・41）などがあるが、中期に比べると減少する。

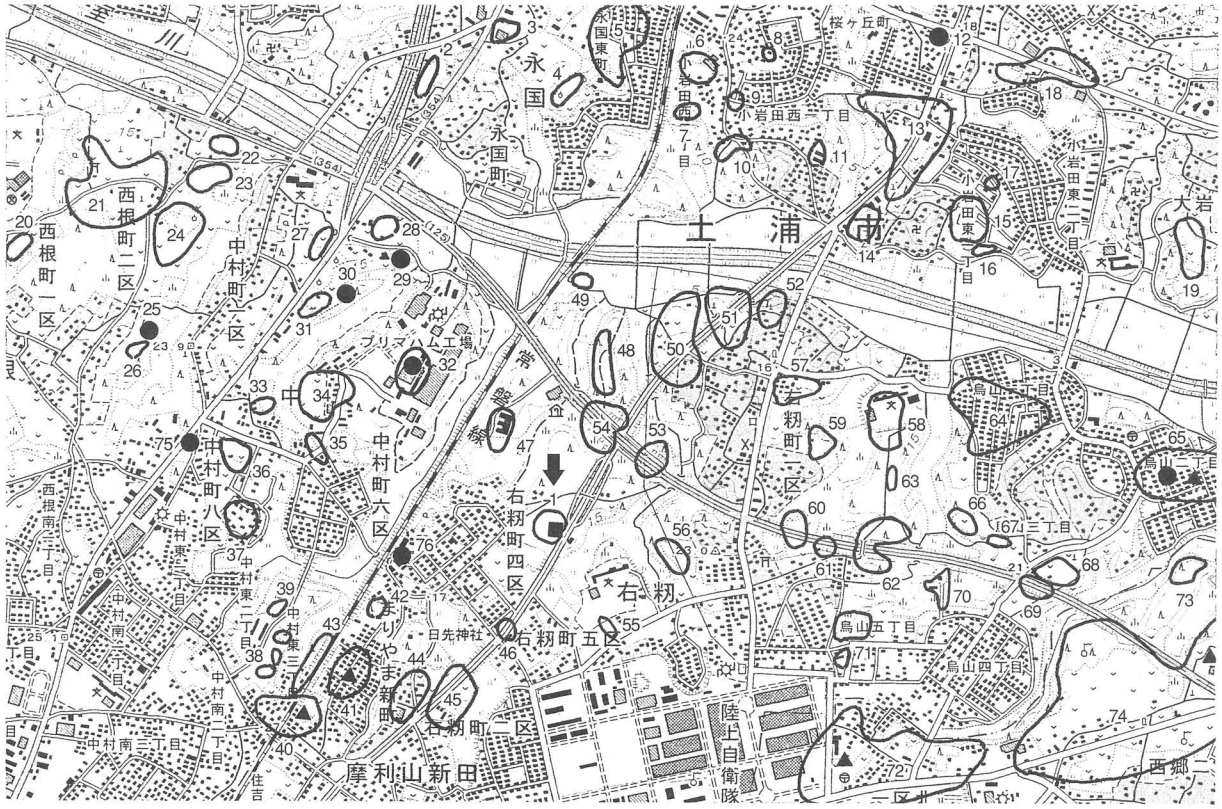
弥生時代の遺跡は少なく、右岸には本遺跡のほか烏山遺跡、左岸には永国遺跡、和台遺跡などがある。これらの遺跡では発掘調査が行なわれており、烏山遺跡や和台遺跡からは後期前半の住居跡、本遺跡や永国遺跡からは後期後半の住居跡が発見されている。いずれも小規模な集落であり、長期継続はみられない。

古墳時代になると遺跡は増加する。前期では本遺跡の他、平坪遺跡（51）、永峰遺跡（58）、烏山遺跡、向原遺跡、堂場台遺跡（20）、左岸には内出後遺跡、永国遺跡、和台遺跡などがある。烏山遺跡では前期の玉作り工房跡が7軒確認されており、瑪瑙を材料とした勾玉や碧玉などを材料とした管玉などの玉作りが行なわれていた。中期から後期の遺跡も多く、市内有数の密集地帯である。形部遺跡、宮前遺跡、永峰遺跡、烏山遺跡、向原遺跡、永国遺跡、阿ら地遺跡、内出後遺跡、神出遺跡などから中期、後期の集落跡が発見された。烏山遺跡や向原遺跡は前期から続く集落である。

古墳は、石倉山古墳群（65）、大日・浅間古墳（25）、向原古墳群（32）、馬道古墳群（29）、南達中古墳（30）などがあり、石倉山古墳群や向原古墳群は終末期の古墳群である。馬道古墳群や南達中古墳からは、円筒埴輪が出土している。前期の古墳は現在のところ確認されていない。

奈良・平安時代の遺跡も多く、右岸に念代遺跡（50）、長峰遺跡、烏山遺跡、南丘遺跡、西郷遺跡、扇ノ台遺跡など、左岸には神出遺跡、永国遺跡、内出後遺跡がある。扇ノ台遺跡や烏山遺跡からは多数の掘立柱建物跡が検出され、ともに拠点的集落であったことがうかがえる。内路地台遺跡では火葬墓が発見されている。

中世の遺跡も館跡など多くの遺跡が確認されている。右籾館跡（53）では堀及び土塁が確認されたが、建物




第２図　周辺の遺跡（１／25,000）　▲貝塚　●古墳（群）（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

と思われる遺構は検出されていない。念代遺跡では地下式壙が４基確認されており、内耳鍋片や瀬戸陶器瓶子底部片が出土した。西郷遺跡では掘立柱建物跡、道路跡、井戸などが確認されており、内耳鍋や瀬戸系陶磁器などが出土している。左岸の神出遺跡からは礎石を使用した掘立柱建物跡や、多数の地下式坑が検出された。内出後遺跡からも土坑や溝、柱穴群などが検出され、青磁の平椀などが出土した。

近世では、水戸街道の一里塚である嵩久保一里塚（75）が、中村宿の北端に存在していた。この他、右籾十三塚など信仰の塚も多く見られる。

以上のように花室下流域一帯は旧石器時代からの遺跡が密集する地域である。これは霞ヶ浦や花室川、樹枝上の谷津を形成した湧水など豊富な水資源が、集落形成に大きくかかわっていたためと思われる。

**遺跡一覧表**

(旧：旧石器　縄：縄文　弥：弥生　古：古墳　平：奈良・平安　中：中世)

| No. | 遺跡名 | 旧 | 縄 | 弥 | 古 | 平 | 中 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 中根遺跡 | | | ○ | ○ | | ○ |
| 2 | 亀井遺跡 | | | | ○ | | |
| 3 | 和台遺跡 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 4 | 永国御灵遺跡 | | | | ○ | | |
| 5 | 永国遺跡 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 6 | 阿ら地遺跡 | ○ | ○ | | ○ | | |
| 7 | 才ノ内遺跡 | | | | ○ | | |
| 8 | 桜ケ丘遺跡 | | | | ○ | | |
| 9 | 油麦田遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 10 | いさろ遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 11 | 谷畑遺跡 | | | | | ○ | |
| 12 | 桜ケ丘古墳 | | | | ○ | | |
| 13 | 内出後遺跡 | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 南古屋敷館跡 | | | | | | ○ |
| 15 | 神出遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 16 | 中居遺跡 | | | | | ○ | ○ |
| 17 | 東出遺跡 | | | | | ○ | ○ |
| 18 | 霞ケ岡遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 19 | 西の前遺跡 | | | | ○ | ○ | ○ |
| 20 | 堂場台遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 21 | 西根宮脇遺跡 | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 22 | 西根平遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 23 | 諏訪遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 24 | 平代地遺跡 | | ○ | | | ○ | ○ |
| 25 | 大日・浅間古墳 | | | | ○ | | |
| 26 | 白楽遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 27 | 南達中Ｂ遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 28 | 馬道遺跡 | | | ○ | ○ | ○ | |
| 29 | 馬道古墳群 | | | | ○ | | |
| 30 | 南達中古墳 | | | | ○ | | |
| 31 | 南達中Ａ遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | |
| 32 | 向原遺跡 | ○ | ○ | | ○ | | |
| | 向原古墳群 | | | | ○ | | |
| 33 | 谷原門Ｂ遺跡 | | | | | ○ | |
| 34 | 谷原門Ｃ遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 35 | 谷原門Ａ遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | |
| 36 | 天神遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | |
| 37 | 扇ノ台遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 38 | 木の宮南Ａ～Ｃ | | ○ | | | ○ | |
| 39 | 木の宮北遺跡 | | ○ | | | | |
| 40 | 峰崎Ｂ遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| | 峰崎貝塚 | | ○ | | | | |

| No. | 遺跡名 | 旧 | 縄 | 弥 | 古 | 平 | 中 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 41 | 摩利山遺跡 | | ○ | | | | |
| | 摩利山貝塚 | | ○ | | | | |
| 42 | 峰崎Ａ遺跡 | | ○ | | | | |
| 43 | 峰崎Ｃ遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 44 | 権現山遺跡 | ○ | ○ | | | ○ | |
| 45 | 宮前遺跡 | ○ | ○ | | ○ | | ○ |
| 46 | 右籾貝塚東遺跡 | | ○ | | | | |
| 47 | 形部遺跡 | ○ | ○ | | ○ | | |
| 48 | 牧の内遺跡 | | | | | ○ | ○ |
| 49 | 塚田遺跡 | | | | | ○ | ○ |
| 50 | 念代遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 51 | 平坪遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 52 | 沖の台遺跡 | | | | ○ | ○ | |
| 53 | 右籾館跡 | | | | | | ○ |
| 54 | 内路地台遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 55 | 右籾宮塚遺跡 | | ○ | | | | |
| 56 | 小谷遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 57 | 堂地塚遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 58 | 永峰遺跡 | | | | ○ | | |
| 59 | 松原遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 60 | 宮塚遺跡 | | | | | ○ | |
| 61 | 数光遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | |
| 62 | 長峰遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 63 | 長峰北遺跡 | | | | ○ | | |
| 64 | 烏山遺跡 | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 65 | 烏山遺跡 | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | 石倉山古墳群 | | | | ○ | | |
| | 烏山貝塚 | | ○ | | | | |
| 66 | 北平南遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 67 | 北平北遺跡 | | | | | ○ | |
| 68 | 堂後遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | |
| 69 | 南丘遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 70 | 小西遺跡 | | ○ | | | ○ | |
| 71 | 烏山Ａ遺跡 | | | | | ○ | |
| | 烏山Ｂ遺跡 | | | | | ○ | |
| 72 | 一区北遺跡 | | ○ | | | | |
| | 一区北貝塚 | | ○ | | | | |
| 73 | 立の越館跡 | | | | | | ○ |
| 74 | 西郷遺跡 | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| | 阿見貝塚 | | ○ | | | | |
| 75 | 嵩久保一里塚 | | | | | | 近世 |
| 76 | 右籾遺跡 | | ○ | | | | |

# 第３章　調査の概要

## １．調査の概要

今回調査した中根遺跡は、試掘調査によって新たに発見された遺跡である。発掘調査で弥生時代後期後半の竪穴住居跡１軒、古墳時代前期初頭の竪穴住居跡３軒、中世の溝２条、時期不明の土坑１基を検出した。土坑については２号住居跡の覆土を掘り込んでおり、床面まで達しているが、土層のみの確認のため、平面形や規模は不明である。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、中世陶器、土製品などで、コンテナ２箱分出土した。

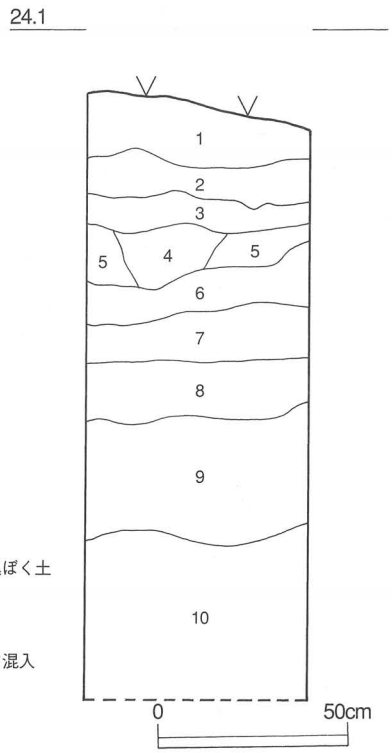
## ２．調査方法

調査の方法は、重機で確認面まで表土を除去し、確認された遺構の検出を行った。竪穴住居跡は十字に土層観察用ベルトを設け、覆土上層から除去した。土層観察後、ベルトを除去し、出土した遺物の状況や完堀状況を図や写真で記録した。写真のフィルムはモノクロームとリバーサルである。

## ３．基本層序

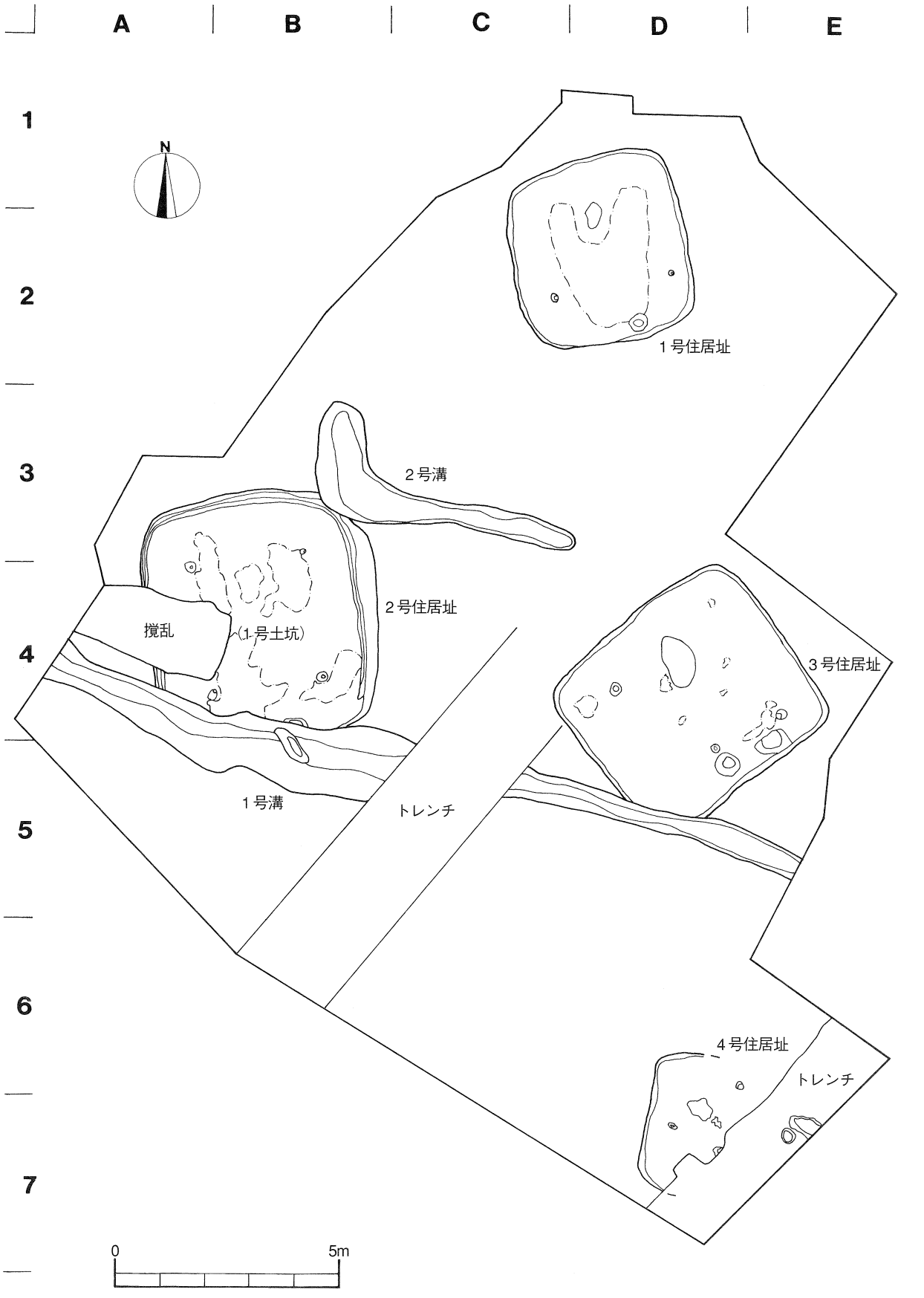
A－４グリッドの撹乱部の西側、調査区壁西面より基本層序を得た。トレンチの幅は約60㎝、深さはおよそ１m60㎝まで掘り下げている。土壌分析は行なっていないが、同一台地上に位置する宮前遺跡の基本層序を参考に、土層の対比を行なってみたい。鍵となる火山ガラスが７層で多量に見られることから、姶良・丹沢火山灰（AT）降下層に相当すると考えた。宮前遺跡では立川ローム第２黒色帯（BBⅡ）上面でATが得られていることから、７層はBBⅡ上部に該当すると想定し、ここから推して８層はBBⅡ下部、６層はソフト化したローム層、５層は立川ローム第１黒色帯（BBⅠ）と推察した。１～３層は耕作土。５層上面が遺構確認面である。

基本層序




基本層序
1　7.5YR3/2　黒褐色　下位に褐色ブロック斑状　粘性弱　黒ぼく土
2　7.5YR4/4　褐色　褐色土ブロックが斑状　粘性弱
3　7.5YR4/4　褐色　粘性弱
4　―
5　10YR4/6　褐色　ソフトローム
6　ソフトローム中に若干色調が明るいハードロームブロック混入
7　火山ガラス多量
8　火山ガラス少量
9　ハードローム
10　ハードローム

第３図　基本層序


A
B
C
D
E
1
2
3
4
5
6
7
N
1号住居址
2号溝
2号住居址
攪乱
(1号土坑)
3号住居址
1号溝
トレンチ
4号住居址
トレンチ
0
5m

第4図　調査区全体図

# 第４章　遺構と遺物

## １．住居跡

### １号住居跡　（第５・６図　PL２・５）

**位置**　C・D－１・２グリッド。

**規模・形状**　長軸4.2m、短軸3.9mの縦長の隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは45cmを測る。

**主軸方向**　N－13°－W

**ピット**　３ヶ所検出された。配置からP－１・２は柱穴、壁際のピットは貯蔵穴と思われる。P－１は径15cmの円形を呈し、深さは21.1cm、P－２は径21cmの楕円形を呈し、深さは23.1cmを測る。P－１・２は対峙している。貯蔵穴は径44cmの楕円形を呈し、深さは31.8cmを測る。遺物は出土していない。

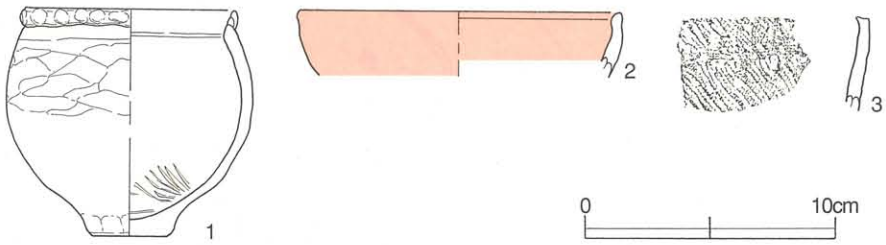
**床**　床面はほぼ平坦で、南側から柱穴の内側、炉跡を囲むように硬化面が残る。また焼土が炉跡の東側に散在しており、炭化材も見られた。

**炉**　中央北寄り、住居跡の主軸に沿うように位置する。床面を７cm程掘り込んで構築された地床炉で、長軸50.9cmの楕円形を呈している。炉跡の奥壁側覆土中に土器片がささった状態で出土していた。

**覆土**　８層に分層された。第８層は壁崩れ土と思われる。第１層を除いては全体に焼土粒・炭化物が混入していた。

**遺物**　住居跡東半床面～覆土下位で散在していた。１はP－２覆土上面、２は炉跡東側覆土中位、３は炉跡北側床面直上で出土している。

**所見**　住居跡の形状と炉跡の位置から南側が入り口部と想定される。出土遺物から時期は古墳時代前期前葉に相当しよう。




第５図　１号住居跡出土遺物

１号住居跡遺物観察表

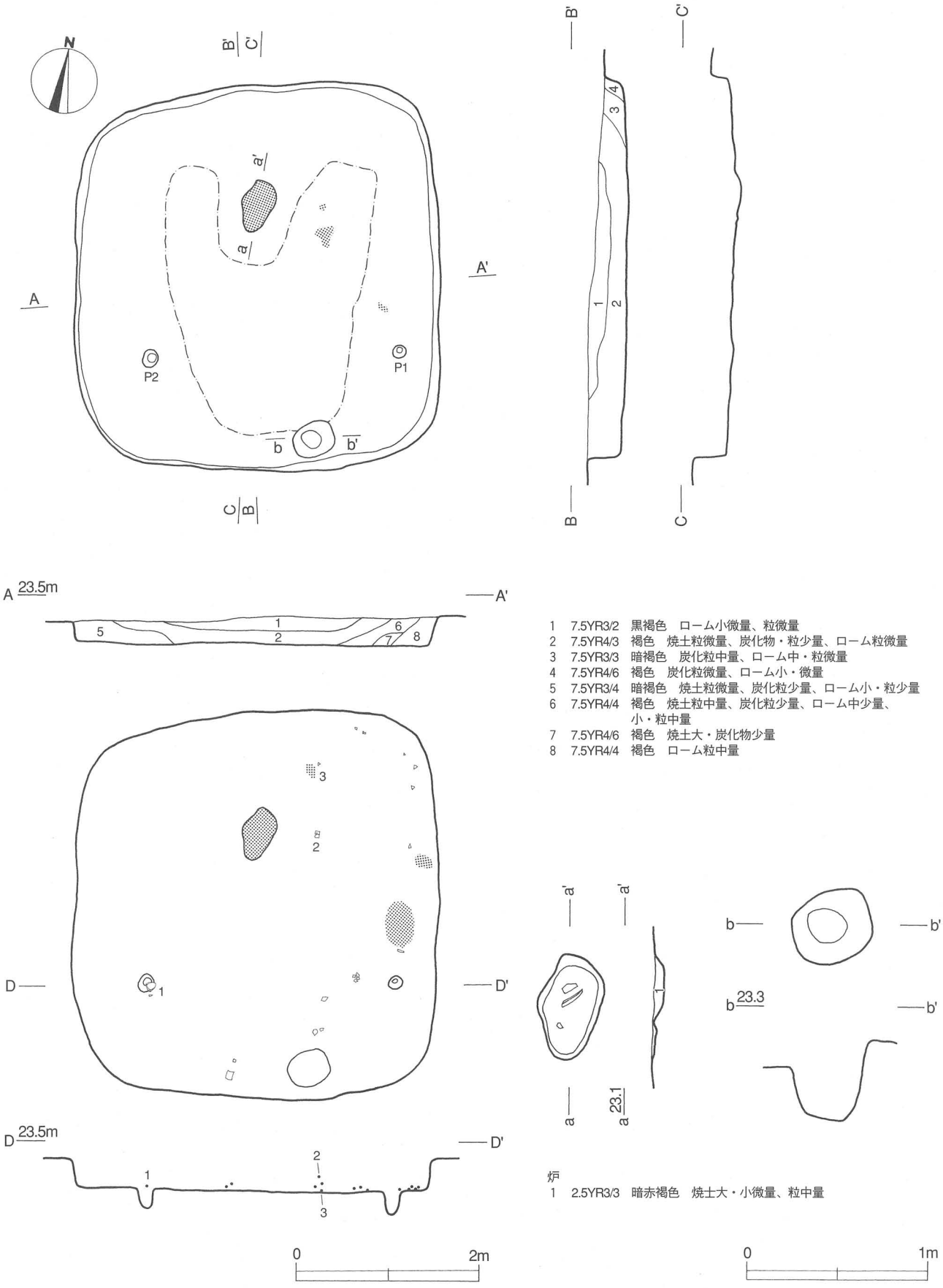
| No. | 器形<br>器種 | 法量(cm) | 出土状況<br>残存 | 色調 | 胎土 | 器形・文様・整形の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉢<br>土師器 | A[ 8.3]<br>B　9.0<br>C　3.2 | P２上面<br>１／２ | 橙 | 長石多量、石英・雲母少量 | 折り返された短い口縁部はナデ後浅く押圧。下半もナデ。内面下半ヘラナデ痕明瞭に残る。 |
| 2 | 高杯<br>土師器 | A[12.8]<br>B( 2.6) | 覆土<br>１／６ | 暗赤褐 | １～２㎜の黄色粒多量 | 口縁部直下浅くナデられる。内外面赤彩。 |
| 3 | 壺<br>弥生土器 | | 床直上 | 灰黄褐 | 長石中量、石英少量 | 附加条ＲＬ＋Ｌ<br>Ｌ　Ｌ |

### ２号住居跡　（第７・８図　PL３・５）

**位置**　A・B－３・４グリッドに位置し、南側で１号溝、北東側で２号溝と重複している。本跡のほうが古い。住居跡中央南寄りでは床面を一部壊して１号土坑が掘り込まれている。

**規模・形状**　長軸5.7m、短軸5.22mの縦長の隅丸方形を呈する。西壁は撹乱により中央部が壊されていた。壁は東側は外傾して立ち上がり、他はほぼ直線的に立ち上がっていた。深さは63cmを測る。

**周溝**　周溝は南側を除き全周し、おそらく撹乱部分も巡っていたと思われる。幅は10～30cm、床面からの深さは６～８cmを測る。


N
B'
C'
a'
a
A'
A
P2
P1
b
b'
C
B
B'
C'
3
4
1
2
B
C
A 23.5m
A'
5
1
2
6
7
8
3
2
D
1
D'
D 23.5m
D'
1
2
3
0
2m
1 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小微量、粒微量
2 7.5YR4/3 褐色 焼土粒微量、炭化物・粒少量、ローム粒微量
3 7.5YR3/3 暗褐色 炭化粒中量、ローム中・粒微量
4 7.5YR4/6 褐色 炭化粒微量、ローム小・微量
5 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒微量、炭化粒少量、ローム小・粒少量
6 7.5YR4/4 褐色 焼土粒中量、炭化粒少量、ローム中少量、小・粒中量
7 7.5YR4/6 褐色 焼土大・炭化物少量
8 7.5YR4/4 褐色 ローム粒中量
a'
a'
a
a 23.1
b
b'
b 23.3
b'
炉
1 2.5YR3/3 暗赤褐色 焼土大・小微量、粒中量
0
1m

第6図　1号住居跡

**主軸方向**　N－2°－W

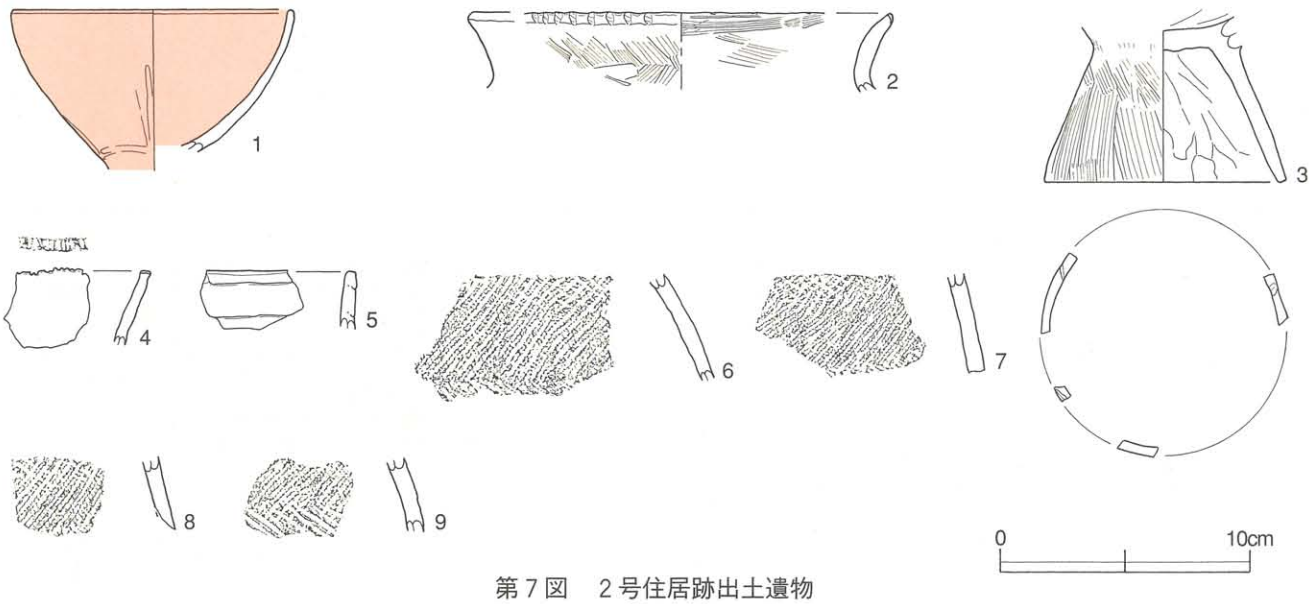
**ピット**　5ヶ所検出された。配置からP－1～4は柱穴、南壁沿いのピットは貯蔵穴と思われる。柱穴は円形・楕円形を基調とし、P－1は径13cm、深さ61.5cm、P－2は径27cm、深さ63.2cm、P－3は径27cm、深さ56.4cm、P－4は径25cm、深さ67cmを測る。深く掘り込まれている点と近似した深さから、主柱穴に相当しよう。貯蔵穴は楕円形を呈し径55cm、深さ43.9cmを測る。遺物は出土していない。

**床**　床面はほぼ平坦で、P－1・3・4の内側とP－2の壁寄りにかけて硬化面が残存していた。またP－1・4の内側では焼土が、東側中央部では焼土と炭化物が散在していた。

**炉**　中央北寄りに位置し、床面を9.6cm程掘り込んで構築された地床炉である。不整形を呈し、長軸は86cmを測る。火床部は南側が他に比べ著しく焼土化しており、部分的に強く熱を受けた様子である。

**覆土**　11層に分層された。壁際にはローム質土が堆積し、平行して堆積する第1～3層中には焼土粒が少～中量混入していた。

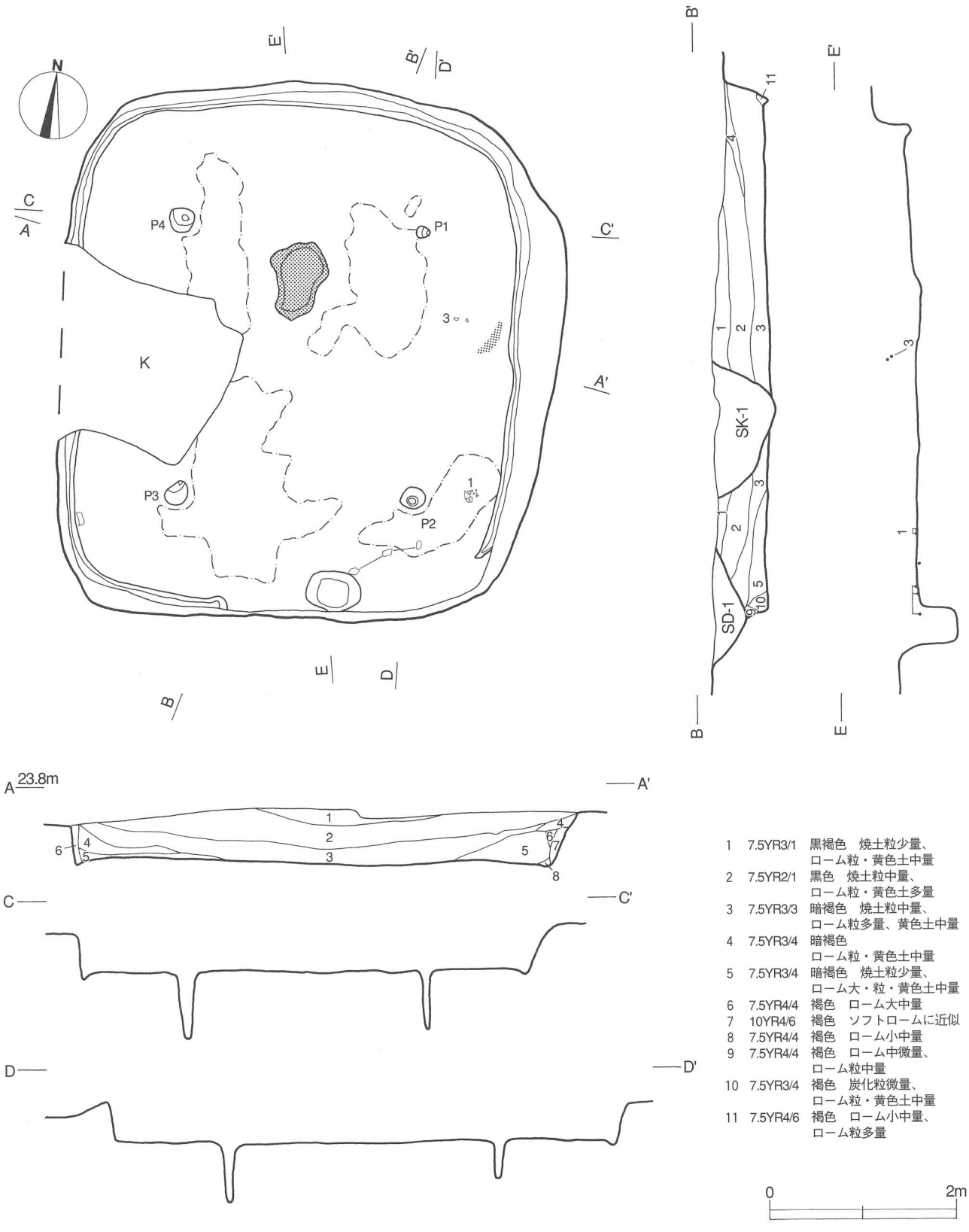
**遺物**　住居跡東側に散在していた。1は床直出土で1号溝南側に位置するピット内から出土した土器と接合している。3は覆土上位からの出土であった。




第7図　2号住居跡出土遺物

2号住居跡遺物観察表

| No | 器形<br>器種 | 法量(cm) | 出土状況<br>残存 | 色調 | 胎土 | 器形・文様・整形の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高杯<br>土師器 | A 11.3<br>B( 5.7) | 床直上<br>1／2 | 暗赤 | 長石中量、雲母少量 | 杯部は椀型。外面縦ミガキ。頸部横ミガキ。内外面ともに剥離が著しい。内外面赤彩。 |
| 2 | 甕<br>土師器 | A[16.8]<br>B( 3.0) | 覆土 | 橙 | 長石中量、石英・雲母少量 | 口縁部は短く立上り外反。口唇部木葉状工具による楕円形刺突。頸部斜位刷毛目。脚部内側指ナデ。内面横位刷毛目。 |
| 3 | 台付甕<br>土師器 | B( 3.0)<br>C[ 9.6] | 覆土 | にぶい黄橙<br>15% | 長石多量、石英中量、雲母少量 | 外面斜位の荒い刷毛目。脚部内側指ナデ。胴内部ヘラケズリ。底面に刺突。 |
| 4 | 甕<br>土師器 | | | 灰黄褐 | 長石中量 | 外傾する器形。口唇部先の細い工具で刺突。外面ナデ。 |
| 5 | 甕<br>土師器 | | | にぶい黄橙 | 混入物ほとんどなし<br>緻密 | 外傾する器形。口唇部平坦面を形成。外面輪積痕が残る。内面横位刷毛目→ナデ |
| 6 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい褐 | 石英多量、長石中量、雲母少量 | 附加条L R＋R<br>R R |
| 7 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい褐 | 長石・石英・砂粒多量、雲母少量 | 附加条R L＋R　羽状。<br>L R |
| 8 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい褐 | 長石・砂粒多量、雲母少量 | 附加条R L＋R　羽状。内面剥離著しい。<br>L R |
| 9 | 弥生土器 | | | 灰褐 | 長石・石英多量 | 附加条R L＋L、R L＋L　羽状。<br>L L　L R |




1 7.5YR3/1 黒褐色 焼土粒少量、ローム粒・黄色土中量
2 7.5YR2/1 黒色 焼土粒中量、ローム粒・黄色土多量
3 7.5YR3/3 暗褐色 焼土粒中量、ローム粒多量、黄色土中量
4 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒・黄色土中量
5 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒少量、ローム大・粒・黄色土中量
6 7.5YR4/4 褐色 ローム大中量
7 10YR4/6 褐色 ソフトロームに近似
8 7.5YR4/4 褐色 ローム小中量
9 7.5YR4/4 褐色 ローム中微量、ローム粒中量
10 7.5YR3/4 褐色 炭化粒微量、ローム粒・黄色土中量
11 7.5YR4/6 褐色 ローム小中量、ローム粒多量

第8図　2号住居跡

**所見**　住居跡の形状と炉跡の位置から南側が入り口部と想定される。時期は床面より出土した1から古墳時代前期前葉に相当しよう。

### 3号住居跡（第9・10図　PL3・5）

**位置**　C～E－4・5グリッドに位置し、南側で1号溝と重複する。本跡のほうが古い。

**規模・形状**　長軸5.14m、短軸4.56mの横長の隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは38cmを測る。

**主軸方向**　N－32°－W

**ピット**　5ヶ所検出された。配置からP－1・2は柱穴、南東壁際は貯蔵穴と思われる。柱穴は円形を基調とし、P－1は径27cm、深さ13.9cm、P－2は径29cm、深さ37.1cmを測る。貯蔵穴は楕円形を基調とし、径72cm、深さ22.1cmを測る。覆土上層に遺物が出土していた。他2つのピットは円形を基調とし、大きな方は径57cm、深さ17.8cm、小さな方は径22cm、深さ16.6cmを測る。

**床**　やや起伏を有している。炉跡の周辺、P－1と貯蔵穴の間、P－2の外側に硬化面が見られた。

**炉**　中央奥壁寄りに、床面を8.6cm程掘り込んで構築された地床炉が位置する。不整楕円形を呈し、長軸1.21m測る。火床面は被熱のため焼土化しており、起伏を有していた。

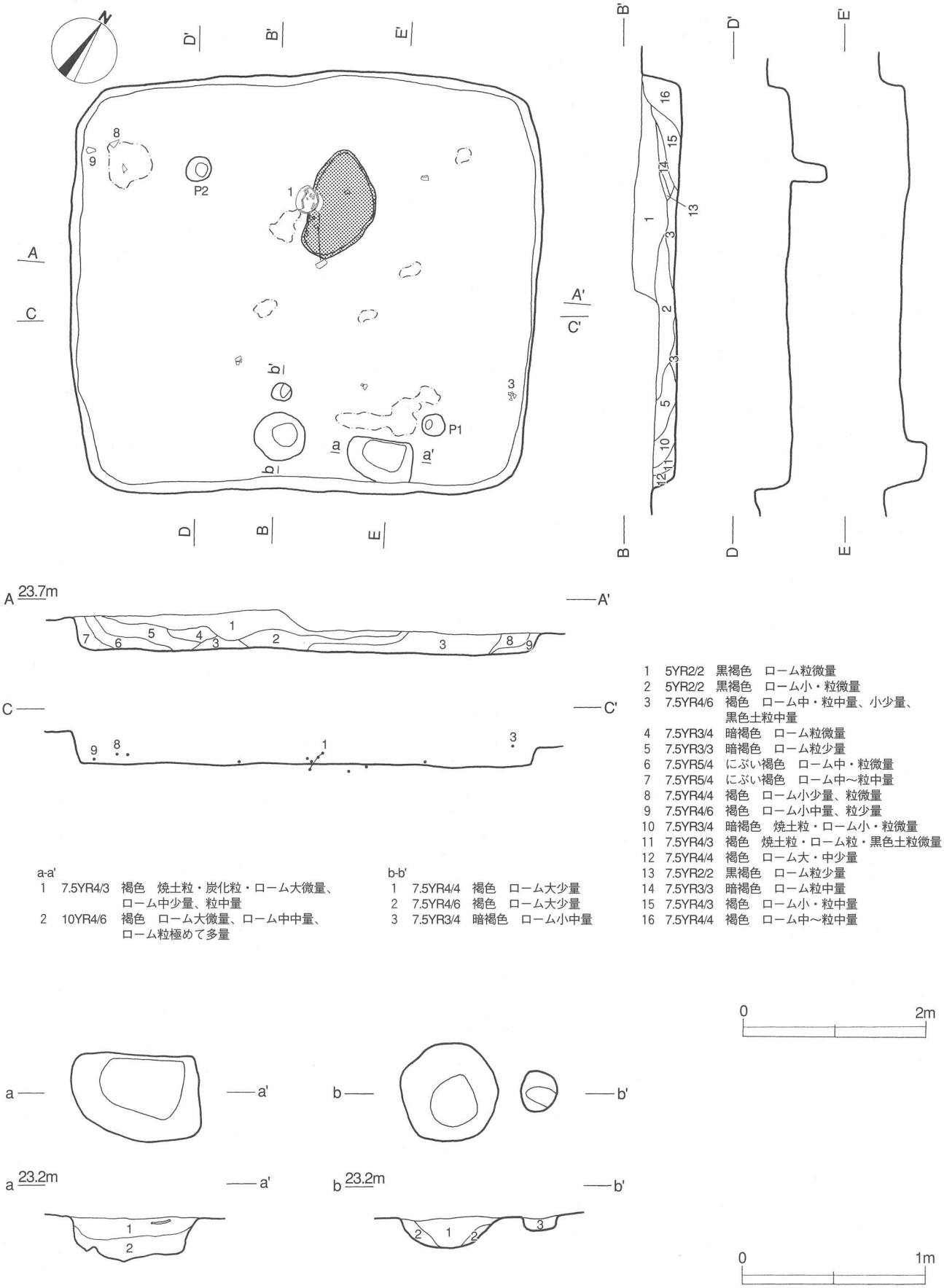
**覆土**　16層に分層された。第10・11層にのみ焼土粒が微量に混入していた。

**遺物**　住居跡全体の覆土上位から床面にかけて散在していた。1は赤彩されたほぼ完形の壺形土器で、炉跡西側にあり、口縁部を炉側に向け倒立した状態で出土した。3は東壁際の覆土上位、8・9は西壁際の覆土下位から出土している。

**所見**　住居跡の形状と炉跡の位置から南東側が入り口部と想定される。時期は炉跡脇の床面直上より出土した1から古墳時代前期前葉に相当しよう。

3号住居跡遺物観察表

| No. | 器形<br>器種 | 法量(cm) | 出土状況<br>残存 | 色調 | 胎土 | 器形・文様・整形の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺<br>土師器 | A 14.8<br>B 28.3<br>C 9.8 | 炉直上<br>完形 | にぶい赤褐 | 長石中量、石英少量 | 内外面赤彩。胴部中位がやや潰れ気味に張り出し、ここを最大径とする。口縁は外反し、頸部からの立上りが高い。底径は口縁よりやや小さい。口縁～頸部縦ミガキ後、細かな刷毛状工具による横ナデ。胴上半ナデ。胴下半横ミガキ。内面ヘラナデ。 |
| 2 | 甕<br>土師器 | B(4.4) | | 橙 | 長石多量、石英・雲母少量 | 胴上半部、胴部右→左にかけて刷毛目。左→右にかけて斜位ミガキ。頸部縦方向刷毛目→沈線状のナデ。木葉状工具による斜位刺突。内面ナデ。 |
| 3 | 高杯<br>土師器 | A[19.8]<br>B(5.6) | 覆土上<br>1／8 | 明赤褐 | 長石中量、石英・雲母少量 | 内外面赤彩。内外面にミガキの痕跡が一部みられる。 |
| 4 | 高杯<br>土師器 | B(2.7) | 1／8 | 浅黄 | 長石・雲母中量、石英少量 | 屈曲位縦ミガキ。脚との接合部直上は同心円状にミガキ。内面ナデ。 |
| 5 | 壺<br>土師器 | B(0.9)<br>C[8.7] | | にぶい黄橙 | 長石中量、石英少量 | 底面無文。内外面ナデ。 |
| 6 | 甕<br>土師器 | | | にぶい黄橙 | 長石中量、緻密 | 外傾する器形。口唇端部に楕円形刺突。外面輪積痕が残る。 |
| 7 | 甕<br>土師器 | | | にぶい黄橙 | 長石中量、緻密 | 外傾する器形。口唇端部に楕円形刺突。外面輪積痕が残る。 |
| 8 | 壺<br>弥生土器 | | 覆土下 | にぶい褐 | 石英・長石多量、雲母少量 | 附加条ＬＲ＋ＲとＲＬ＋Ｌの羽状。内面剥離が著しい。<br>Ｒ　Ｒ　　Ｌ　Ｌ |
| 9 | 壺<br>弥生土器 | | 覆土下 | にぶい赤褐 | 石英・長石多量、雲母中量 | 附加条、軸不明瞭。恐らくＬｌ＋ｌとＬｒ＋ｒの羽状。<br>内面剥離が著しい。　　ｌ　ｌ　　ｒ　ｒ |
| 10 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい赤褐 | 長石中量、雲母少量 | 附加条、軸は不明。Ｌｌを付加、撚り戻しのため乱れる<br>内面剥離が著しい。　ｌ |
| 11 | 壺<br>弥生土器 | | | 灰褐 | 石英・長石多量 | 附加条、ＲＬ＋Ｌ<br>Ｌ　Ｌ |
| 12 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい赤褐 | 石英多量、長石・雲母少量 | 附加条、軸は不明。＋ｌ<br>ｌ |
| 13 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい赤褐 | 長石・石英多量、雲母少量 | 附加条、軸は不明。＋ｒ　羽状、内面剥離が著しい。<br>ｒ |
| 14 | 紡錘車 | 径[4.4]<br>厚 1.6 | 1／2 | 暗灰 | 長石中量 | 無文。全面良好に研磨。片側から穿孔される。図示側中央部がやや盛り上がり、穿孔の出口と思われる。 |



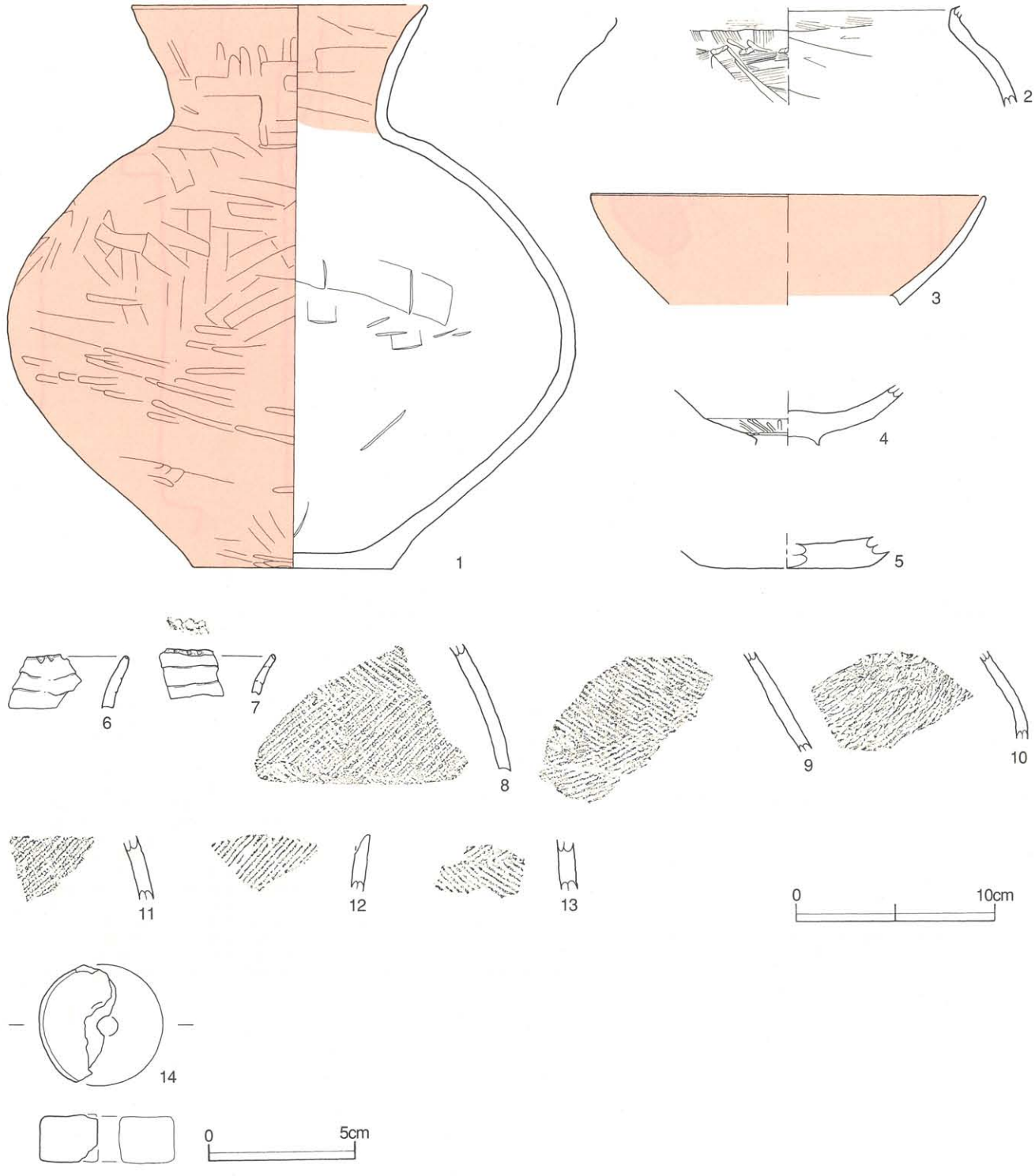

a-a'
1 7.5YR4/3 褐色 焼土粒・炭化粒・ローム大微量、ローム中少量、粒中量
2 10YR4/6 褐色 ローム大微量、ローム中中量、ローム粒極めて多量

b-b'
1 7.5YR4/4 褐色 ローム大少量
2 7.5YR4/6 褐色 ローム大少量
3 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小中量

1 5YR2/2 黒褐色 ローム粒微量
2 5YR2/2 黒褐色 ローム小・粒微量
3 7.5YR4/6 褐色 ローム中・粒中量、小少量、黒色土粒中量
4 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒微量
5 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒少量
6 7.5YR5/4 にぶい褐色 ローム中・粒微量
7 7.5YR5/4 にぶい褐色 ローム中～粒中量
8 7.5YR4/4 褐色 ローム小少量、粒微量
9 7.5YR4/6 褐色 ローム小中量、粒少量
10 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒・ローム小・粒微量
11 7.5YR4/3 褐色 焼土粒・ローム粒・黒色土粒微量
12 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中少量
13 7.5YR2/2 黒褐色 ローム粒少量
14 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒中量
15 7.5YR4/3 褐色 ローム小・粒中量
16 7.5YR4/4 褐色 ローム中～粒中量

0 2m
0 1m

第9図　3号住居跡




第10図　3号住居跡出土遺物

**4号住居跡（第11・12図　PL 4 ・ 5）**

**位置**　調査区南端D･E－6・7グリッドに位置する。住居跡東半は試掘調査時のトレンチにより壊されている。

**規模・形状**　試掘調査時のトレンチにより壊されているため全貌は不明だが、おそらく方形を呈すると思われる。長軸3.9m、短軸3.2m、壁は緩やかに立ち上がり深さ17cmを測る。

**ピット**　試掘調査時のトレンチを挟んで西側に３ヶ所、東側に２ヶ所検出された。規模・深さ・配置からいずれが柱穴かの特定は困難であった。西側の３ヶ所は不整形。楕円形を基調とし、径は21～26㎝、深さ5.4～11.1㎝、東側の２ヶ所は径36～(64)㎝、深さ11.1～13.6㎝を測る。

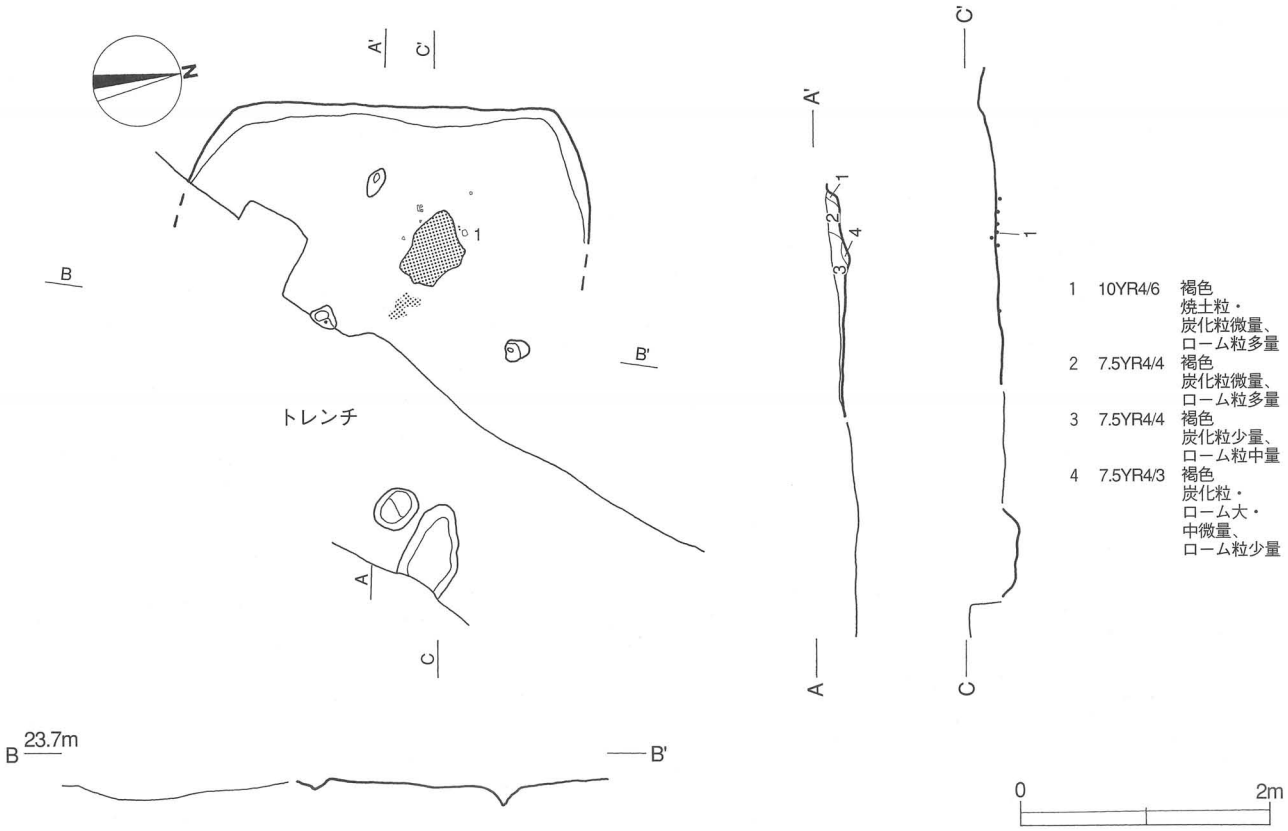
**床**　やや起伏を有している。炉跡の東側に焼土が散在していた。

**炉**　北西寄りに地床炉が１ヶ所構築されている。不整形を呈し、長径は62㎝を測る。床面を掘り込んではおらず焼土が２～３㎝盛り上がっていた。

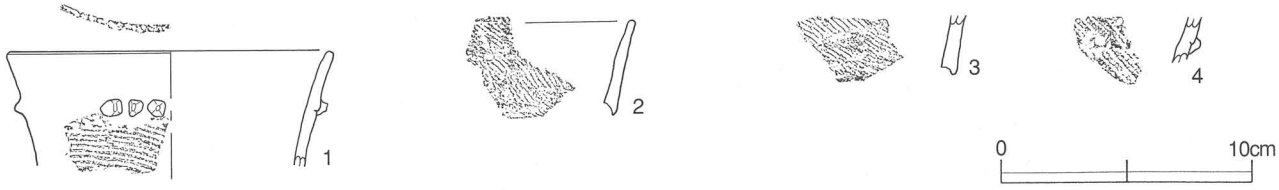
**覆土**　覆土が薄く堆積するところで４層に分層された。全体に炭化物の混入が見られた。

**遺物**　炉跡周辺に散在していた。１は炉跡北側床面上より出土している。

**所見**　時期は出土遺物より弥生時代後期後半に相当しよう。




第11図　４号住居跡




第12図　４号住居跡出土遺物

4号住居跡遺物観察表

| No. | 器形<br>器種 | 法量(cm) | 出土状況<br>残存 | 色調 | 胎土 | 器形・文様・整形の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺<br>弥生土器 | A[13.0]<br>B( 4.5) | 床直上 | 黒褐 | 石英多量、長石中量、雲母少量 | 外傾する器形。口縁部無文帯と縄文帯の堺に突起・刺突。口縁部原体押圧し刺突の効果。<br>付加条、軸不明だが恐らくRL＋L<br>L L |
| 2 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい黄橙 | 長石中量、雲母少量 | 無節R 1 外傾する器形。口唇部原体押圧により刺突の<br>1 効果。3と同一か |
| 3 | 壺<br>弥生土器 | | | 黒 | 長石少量 | 無節R 1 2と同一か。<br>1 |
| 4 | 壺<br>弥生土器 | | | にぶい黄橙 | 長石少量 | 附加条RL＋L 口縁部直下片。口縁と並行に折り返し<br>L L を有し、ここに突起と刺突。 |

## 2．溝

### 1号溝（第13・14図　PL4・5）

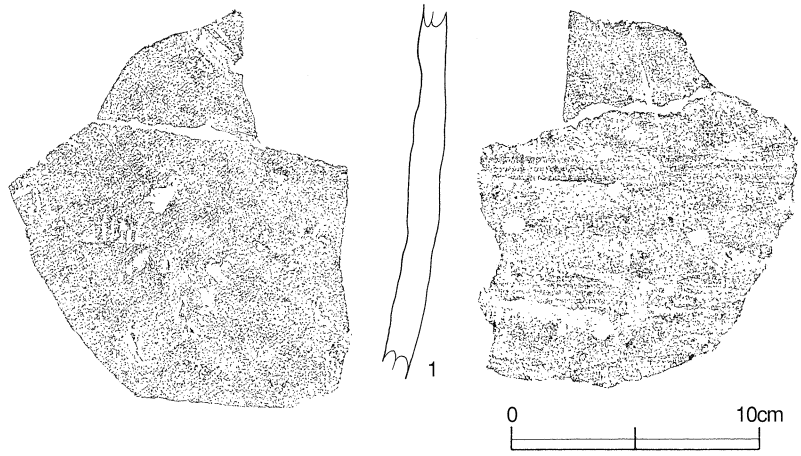
**位置**　A～E－4・5グリッドに位置する。1号溝の北側で2・3号住居跡と重複しており本遺構が新しい。中央付近はトレンチにより壊されている。

**規模・形状**　長軸は調査区東西にわたり、両端は調査区外へと延びている。全長（17.4m）、幅は最長で1.5m、最短で40cmを測り、東側にかけて幅が狭くなっている。深さは20～30cmで、東西方向で高低差は見られない。溝底面は丸みを帯びており壁は緩やかに立ち上がっている。西側坑底部にはピットが1ヶ所見られた。楕円形を呈し、長径1.2m、短径17cm、深さは12cmを測る。

**覆土**　東側のC－C´で焼土と炭化物が少量混入していた。

**遺物**　1は溝の中央部（検出範囲において）、覆土下位より出土している。

**所見**　台地を横断するように配置されており、何らかの境を示す溝であろうか。出土遺物などから中世の溝の可能性が考えられる。




第13図　1号溝出土遺物

1号溝遺物観察表

| No. | 器形<br>器種 | 法量(cm) | 出土状況<br>残存 | 色調 | 胎土 | 器形・文様・整形の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕<br>陶器<br>（常滑） | | 床面 | 灰褐 | 長石多量、砂粒・小礫中量 | 外面タタキ→ナデ。内面間隔をあけてナデ。 |

### 2号溝（第14図　PL4）

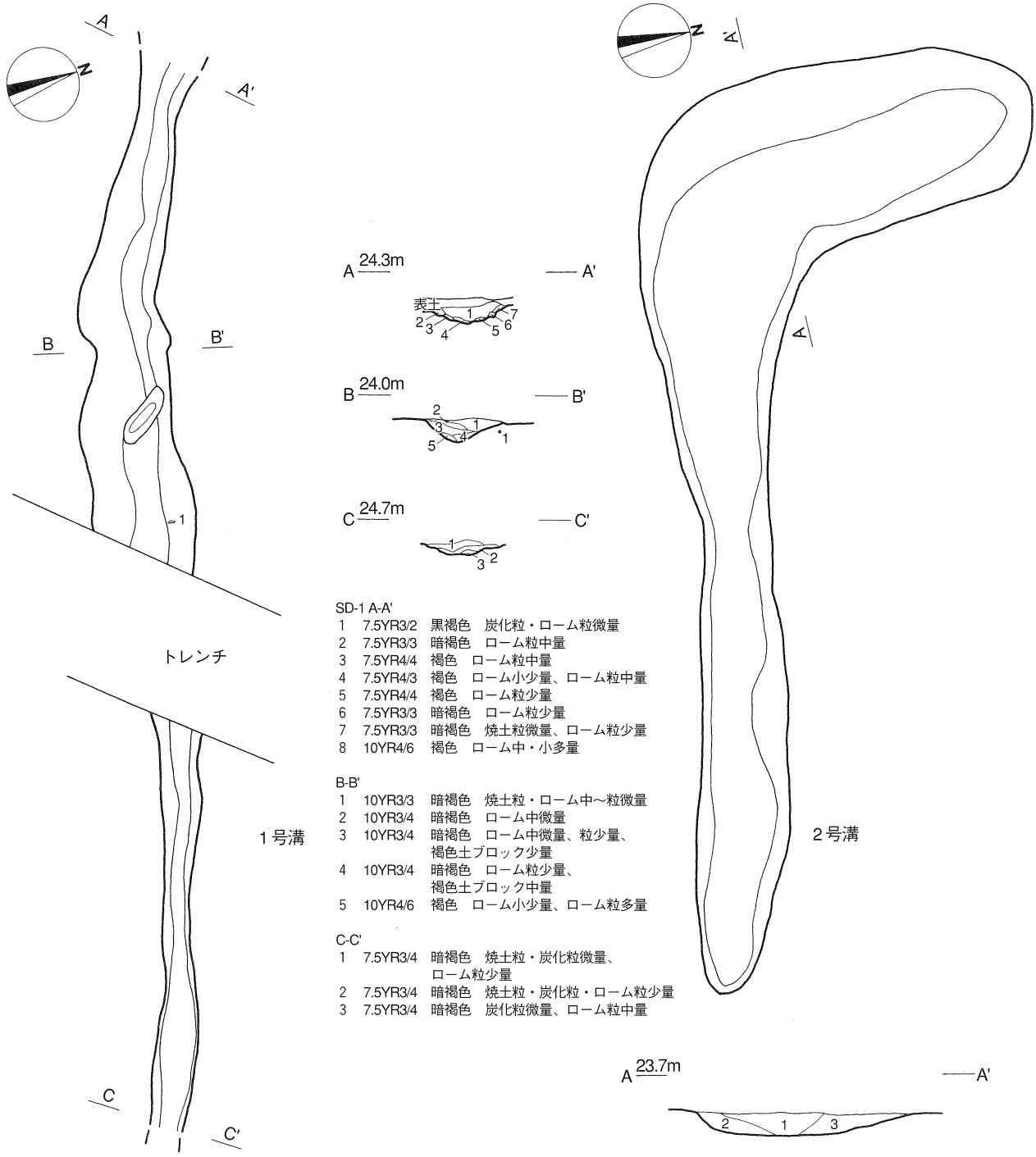
**位置**　B～D－3グリッドに位置する。南側で2号住居跡と重複しており、本遺構が新しい。

**規模・形状**　北側から東側にかけてL字状に屈曲している。長さは南北2.6m、東西5.85mで東西方向に南北方向のおよそ2倍の長さで延びている。軸は北側が1.18cmで、東側に向かうにつれて狭くなり、55cm程となる。最深部は18cmを測り、底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

**覆土**　3層に分層される。全体に黄色のソフトロームブロックが混入していた。これらは埋め戻し土の可能性が高い。

**遺物**　少量の土師器片が覆土中より出土しているが、本遺構に伴うものではなく、図化していない。

**所見**　重複関係から2号住居跡より新しい中世以降の溝と考えられる。性格は特定することが困難である。




SD-1 A-A'
1 7.5YR3/2 黒褐色 炭化粒・ローム粒微量
2 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒中量
3 7.5YR4/4 褐色 ローム粒中量
4 7.5YR4/3 褐色 ローム小少量、ローム粒中量
5 7.5YR4/4 褐色 ローム粒少量
6 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒少量
7 7.5YR3/3 暗褐色 焼土粒微量、ローム粒少量
8 10YR4/6 褐色 ローム中・小多量

B-B'
1 10YR3/3 暗褐色 焼土粒・ローム中～粒微量
2 10YR3/4 暗褐色 ローム中微量
3 10YR3/4 暗褐色 ローム中微量、粒少量、褐色土ブロック少量
4 10YR3/4 暗褐色 ローム粒少量、褐色土ブロック中量
5 10YR4/6 褐色 ローム小少量、ローム粒多量

C-C'
1 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒・炭化粒微量、ローム粒少量
2 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒・炭化粒・ローム粒少量
3 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微量、ローム粒中量

SD-2
1 7.5YR3/3 暗褐色 リフトローム塊少量、ローム小中量、ローム粒多量
2 7.5YR4/4 褐色 リフトローム塊・粒多量、ローム小中量
3 7.5YR4/3 褐色 リフトローム塊中量、ローム粒多量

0 5m
0 2m

第14図 1号溝 2号溝

## 3．土坑

### 1号土坑　（第8図）

**位置**　B－4区に位置する。2号住居跡と重複しており、本遺構が新しい。

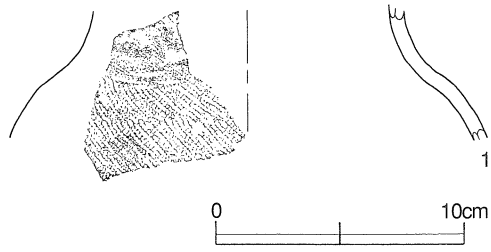
**規模・形状**　土層で確認されたため、平面の規模や形状は不明である。断面は南側が緩やかで、北側は急な立ち上がりである。深さは0.65mを測る。

**覆土**　ロームや炭化粒、焼土粒を僅かに含む黒褐色土で、締まりが弱い。底面に薄く堆積している覆土は、褐色土でロームを多量に含んでいる。

**所見**　本遺構に伴う遺物が出土していないため、時期や性格は不明であるが、重複関係や、覆土の状況から中世以降の可能性が考えられる。

## 4．遺構外出土遺物（第15図　PL5）

本遺跡より出土した遺物はコンテナ2箱程で全体に遺物量は少なかった。図化に堪えるものもわずかで1点を図示するに留まった。試掘調査時のトレンチからの出土である。




第15図　遺構外出土遺物

遺構外遺物観察表

| No. | 器形<br>器種 | 法量(cm) | 出土状況<br>残存 | 色調 | 胎土 | 器形・文様・整形の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺<br>弥生土器 | B(5.0) | | 灰褐 | 長石多量、石英・雲母少量 | 附加条ＲＬ＋Ｌ　頸部はくびれる。頸部を無文帯とし、<br>Ｌ　Ｌ　上下縄文施文。外面炭化物付着。 |

# 第5章　総　　括

今回の調査では、弥生時代後期後葉の住居跡1軒と、古墳時代前期初頭の住居跡が3軒検出された。弥生時代後葉から古墳時代前期前半は、列島規模で人の移動が活発化する時期である。土浦周辺地域においても、附加条縄文に代表される弥生土器の特徴が消滅し、刷毛目やナデの新しい土器に急激に変わっていった。この状況から、他地域からの大きな人の移動があったことは容易に推測できる。本遺跡も古墳時代の集落は、南関東からの新しい人々によって形成された集落と考えられる。

ここでは、本遺跡の資料を中心に、花室川下流域の弥生時代後期から古墳時代前期の様相について紹介し、流入ルートを解明する資料のひとつとしたい。

## 1．弥生時代

### (1) 中根遺跡の弥生土器

4号住居跡は弥生時代後期の住居跡である。ここからは無文の複合口縁部下端にイボ状突起を持ち、頸部上位に附加条縄文を施文する壺の小片が出土している。羽状はみられない。この地域に多く出土するタイプで、鈴木正博氏によって「下大津式阿玉台北系列」と分類されている。(註1)

2号・3号住居跡は古墳時代前期の住居跡であるが、覆土下層から弥生土器の胴部片が出土した。ここから出土した土器の胎土には、大粒の長石が多量に含まれている。対岸の永国遺跡からも同様の胎土の大型壺が出土している。桜川流域の宍塚遺跡や天の川流域の原田遺跡群出土の弥生土器には、長石・石英・雲母が多量に含まれているが、本遺跡ほどの粒の大きさや含有量はない。第10図9・13は羽状で、縄文原体は鬼怒川中流域の二軒屋式と似た特徴を持つ。永国遺跡からも同様の弥生土器が出土しており、このタイプは長石を多量に含んでいる。2号・3号住居の弥生土器は、4号住居遺物より後出のものであろう。

### (2) 花室川流域の弥生遺跡

花室川下流域は、湧水が多く谷津が発達した地域で、遺跡の密集地域である。しかし弥生時代の遺跡は少なく、本遺跡のほか、和台遺跡、永国遺跡、烏山遺跡（註2）など数遺跡にすぎない。

烏山遺跡（東台地）は河口に近い右岸台地上に立地し、住居跡が4軒検出された。土器は附加条縄文の施された複合口縁壺で、時期は後期前半に位置付けられる。

和台遺跡は、河口から約4㎞入った左岸台地上に立地し、住居跡が1軒検出された。土器は附加条縄文施文の複合口縁に、頸部には櫛描文施文や無文の壺が出土した。一部、赤彩された大型の壺もみられる。時期は後期前半に位置付けられる。土器以外では、紡錘車、糸巻型の土製品、石皿、敲石、磨石、石英片などが出土した。

永国遺跡は、和台遺跡の東0.4㎞に立地する。3次にわたり発掘調査が行なわれ、報告によると第1次調査で2軒、3次調査で1軒の住居跡が検出されている。(註3)　1次調査の1軒は、古墳時代前期の土器も出土していることから古墳時代の住居の可能性もある。永国遺跡の弥生土器は、大粒の長石を多量に含むニ軒屋式に近い原体で羽状縄文のタイプと、十王台式系の櫛描文や隆帯を持つタイプが出土している。十王台式系と判断した土器は頸部のみで、十王台式の特徴である附加条二種施文の胴部は出土していない。他に口縁部に輪積痕を残し、輪積痕上に附加条縄文を施文したほぼ完形の壺が出土した。器形からみても在地の系統ではない。この壺が出土した住居跡は、古墳時代前期の土師器が多い。1次調査の弥生土器は弥生時代最終末期に位置付けられる。3次調査で発見された住居跡は床面積8㎡程度で、遺物は弥生土器小片のみである。また3次調査でも古墳時代前期の住居跡から弥生土器が出土している。この土器は大型の壺で羽状縄文である。しかし、原体は二軒屋式系ではなく、また、胎土も大粒の長石を多量に含むものではない。

他には、馬道遺跡、内根A遺跡、西根宮脇遺跡などが踏査などで確認されている程度で、遺跡数は少ない。また、纏まった集落も未確認である。

## 2．古墳時代

### (1) 中根遺跡出土の土師器

1号住（第5図）2は、内外面赤彩された小型高杯の口縁部である。胎土は黒味を帯びており、1～2㎜の橙色の粒を多量に含んでいる。埼玉県春日部市の尾ヶ崎遺跡やさいたま市篠山遺跡からは、同様の土器を砕いたような橙色の粒子を混入した土師器が発見されている。(註4) この粒は大宮台地周辺の全部の土器にみられるものではなく、同一の遺跡でも混入していない土器がある。よって、何らかの意図をもって混ぜたものであろう。橙色の粒が混入された土器は、市内では桜川左岸の大宮前遺跡でも発見されている。(註5) 大宮前遺跡では赤彩された直口壺に多量に混入され、共伴の輪積痕を残す甕にも僅かだが混入がみられる。

2号住（第7図）1は、内外赤彩された小型高杯の杯部である。内彎して立ち上がり、口唇部は弱い面をもつ。内外面に斑点状の剥離が激しい。1号住2のような橙色の粒は含まない。2は刷毛状工具による刻み目をもつ甕、3は台付甕の脚部である。2は台付甕の可能性がある。4・5は甕の口縁で、4は口唇部にヘラ状工具による細かく雑な刻み目がみられ、ナデ調整である。5の口唇部は面取りされ外面に輪積み痕がみられ、内面には刷毛目が施される。5は大宮台地から印旛沼西岸に多くみられるタイプで、台付甕と思われる。この他に図化していないが、1号住2のような橙色の粒を多量に含んでいる壺が出土している。

3号住（第10図）1は、炉直上から出土した赤彩された壺である。ミガキの後、一部刷毛状工具によるナデ調整が行なわれている。胴部中位に最大径をもつ。2の甕は、肩部に烈点文がみられる。3の高杯は、赤彩されて器形は僅かに内彎するタイプである。4の高杯は杯部下端に稜を持つ。6・7の甕は口唇部に刻み目が見られ輪積み痕を残す。この甕は2号住の5とは別系統と思われ、印旛沼周辺の弥生土器である臼井南式の系統かもしれない。

### (2) 花室川流域の古墳時代前期の様相（第16図）

花室川下流域の弥生時代集落は、先に述べたように極めて少ないが、古墳時代になって形成され始める。遺跡を見ると、本遺跡の他に、烏山遺跡（東台地）、永峰遺跡、堂場台遺跡、和台遺跡、内出後遺跡、永国遺跡などで初期段階の集落を確認することができる。この時期の集落は谷津の奥まった台地上に多く、未だ小規模である。

和台遺跡では住居跡が1軒検出され、台付甕や二重口縁壺、ナデ調整甕などが出土した。炉には、本遺跡1号住と同様、甕の胴部片が埋められていた。永国遺跡は、第3次調査において4軒検出された。ここからは胴部に単節縄文が施文された壺など、過渡期の土器が出土した。また、口縁部下端に凸帯を巡らす特徴的な小形鉢が数点出土しており、系統を考える上で重要な資料である。烏山遺跡（東台地）からは、住居跡が1軒検出され、ナデ調整の甕などが出土した。上総地域との関連がうかがえる土器である。内出後遺跡、平坪遺跡、永峰遺跡からは、棒状浮文のついた装飾壺、堂場台遺跡からは、口縁部に輪積み痕を残す台付甕や、被籠壺が出土した。(註6)

次段階になると、烏山遺跡の西台地と東台地では、古代まで継続する集落が形成される。注目されるのは西台地で発見された玉作工房跡である。メノウの勾玉、碧玉などの管玉の工房跡で、メノウの勾玉工房跡としては、市内の八幡脇遺跡（註7）とともに全国で最も古く位置付けられている。東台地では、20軒近い住居跡が発見されている。向原遺跡は、古墳時代後期まで継続する集落が形成され、前期61軒を含む住居跡90軒と終末期の方墳2基が検出された。前期が中心の集落である。ここでは8世紀以降の住居跡は確認されず、古墳の築造をもって土地利用が終了している。(註8)

古墳時代中期や後期の集落も多く、密集地域となっている。特に5世紀後半から7世紀初頭にかけての集落が多い。内出後遺跡や、永峰遺跡もこの時期が中心である。

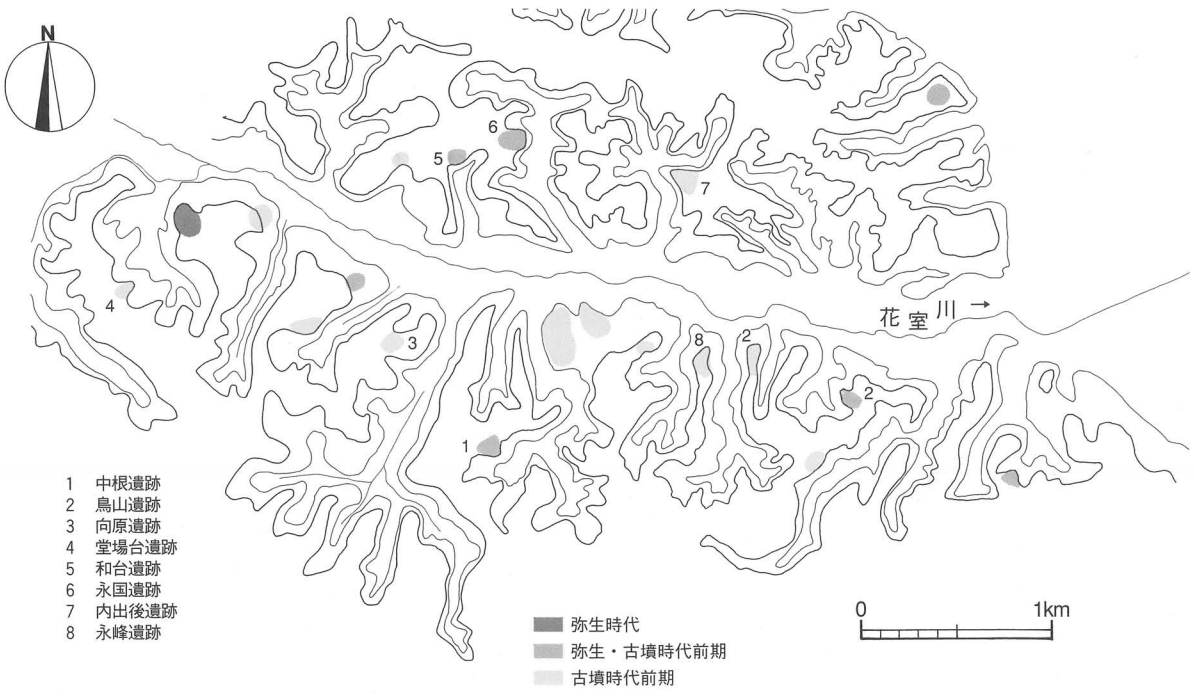
古墳をみると、前方後円墳では6世紀代のひさご塚古墳がある程度で、それ以外は戦時中に湮滅した五蔵古墳に、その可能性が考えられている。他には、埴輪をもつ中内山古墳群や馬道古墳群、南達中古墳、終末期方墳群の石倉山古墳群、向原古墳群、寺家ノ後B古墳群が存在するが、現在のところ前期と中期の古墳は未確認である。

## 3．まとめ

花室川下流域における弥生時代の遺跡は、古墳時代と比べると極めて少なく４軒を超える集落は未確認である。本遺跡も調査区外での遺物散布は少なく、広範囲に展開する状況は確認できない。この一帯は分布調査や踏査、多くの発掘調査、試掘・確認調査が行なわれており、未発見の弥生遺跡が数多く存在しているとは考えにくい。（註９） 現状においては弥生遺跡が少ない地域と言えるであろう。微高地などの低地に存在する可能性について、当エリア一帯には、台地から延びる低位の段丘や緩斜面、下位段丘がみられるが、そこから弥生時代の遺構、遺物が発見された例は現在のところない。（註10） 市内で弥生遺跡が密集している天の川流域や宍塚大池周辺は、同じように谷津が発達している地形である。しかし同環境の花室川下流域に遺跡が少ないのは、何らかの要因があるのかもしれない。

弥生終末から、古墳時代初頭にかけて所謂南関東から人の流入が始まる。花室川下流域にも本遺跡をはじめ、いくつかの遺跡で初期の集落がみられる。本遺跡をみれば、大宮台地周辺の土器に類似点がみられることから、この地域からの流入であろう。鳥山遺跡では、上総系の土器が出土しており、印旛沼周辺を経由して入り込んだ可能性がある。また、花室川の北に流れる桜川下流域の遺跡からは、北陸系の土器が出土している。これらの状況から、土浦地域には多方面からの流入が考えられる。

古墳時代前期以降に集落が増加する状況は、人が入り込み、やがて定着したためであるが、その要因として安定した生業活動が考えられる。この地域の谷津の発達は、豊富な湧水によって形成されたもので、この湧水を利用した水田耕作と、霞ヶ浦や花室川での漁撈が主要な生業であろう。河口から約４㎞までの古墳時代の遺跡からは、例外なく大量の土玉が出土している。この地域の古墳時代における集落のあり方は、豊富な水資源の活用によるものと思われるが、弥生社会については、これらの資源を活かす技量が欠如していたのか、或いは、必要としない社会であったのかもしれない。




第16図　花室川下流域の弥生時代・古墳時代前期集落跡

**註**

（1）1999　鈴木正博　「本邦先史考古学における「土器形式」と縦横の「推移的閉包」」『古代』106号
早稲田大学考古学会

（2）烏山遺跡は３箇所の尾根状台地に存在し、３次調査まで行なわれている。西と中央の台地は国士舘大学と茨城県教育委員会（第１次・２次調査）、東の台地は茨城県教育委員会によって調査された。（第３次調査）
1975　西宮一男他　『烏山遺跡』　茨城県住宅供給公社
1980　大川　清編　『烏山遺跡』　土浦市教育委員会

（3）永国遺跡は３次調査まで行なわれている。１次調査は日本窯業史研究所、２次・３次調査は土浦市遺跡調査会によって調査された。
1983　大川　清編　『永国遺跡』　日本窯業史研究所
2008　窪田恵一　『永国遺跡（第３次調査）』　土浦市教育委員会

（4）さいたま市立博物館で展示していた篠山遺跡の土器をみたところ、中根遺跡と同様の橙色の粒が確認できた。
1983　笹森紀巳子　『尾ヶ崎遺跡』　庄和町尾ヶ崎遺跡調査会
1988　笹森紀巳子　「篠山遺跡」『中里遺跡　篠山遺跡』　大宮市遺跡調査会報告　別冊４　大宮市遺跡調査会

（5）2004　関口　満　『大宮前遺跡』　土浦市教育委員会

（6）堂場台遺跡は中新台遺跡の南に位置する遺跡である。報告書では台付甕と器台の２点を紹介している。
1996　橋場君男　『中新台遺跡』　土浦市教育委員会
2008　黒澤春彦　「茨城県出土の輪積痕をもつ甕」『生産の考古学２』

（7）2009　関口　満　『八幡脇遺跡』　土浦市教育委員会
八幡脇遺跡では、玉作り工房跡のほか、鍛冶工房跡も発見されている。

（8）1987　中野修秀他　『向原遺跡』　土浦市教育委員会

（9）花室川下流域は発掘調査事例が多い地域である。昭和では永国遺跡、烏山遺跡、向原遺跡、摩利山遺跡、寺家ノ後遺跡群などで住宅団地造成や工場建設による発掘調査が行なわれた。また、桜土浦インターチェンジ建設において下広岡遺跡が調査された。平成になってからは、念代遺跡、平坪遺跡、南丘遺跡、西郷遺跡、長峰遺跡、宮前遺跡など道路工事に伴う調査、峰崎遺跡群、扇ノ台遺跡、神出遺跡群、永国遺跡（第３次）、谷原門Ｃ遺跡、六十原遺跡、六十原Ａ遺跡など住宅団地造成に伴う調査、本遺跡や内出後遺跡、和台遺跡、阿ら地遺跡、形部遺跡、中新台遺跡、二又遺跡など、建物建設や運動施設建設による調査が行なわれた。また、試掘確認調査も多く行なわれている。

(10) 台地直下の低い箇所について、数箇所だが試掘確認調査を行なっている。橘下遺跡は、標高14～10ｍの緩斜面上に立地し古墳時代から平安時代の遺物が散布している。２回確認調査を行なったが、土砂が１ｍ以上堆積し、その下はシルト層である。シルト層の上面から須恵器や内耳鍋などが出土した。調査では遺構は確認されず、軟弱な基盤と水が涌くことから住居等が構築される環境ではない。遺物は、台地上の内出後遺跡からの流れ込みと思われる。中居遺跡は、標高８ｍ、低地との比高差４ｍの狭い下位段丘で、表土の下にはロームが堆積している。ここからは平安時代の住居跡やテラス状遺構が発見された。神出遺跡の北側の谷も試掘したが、土砂が厚く堆積し、遺構・遺物は発見されなかった。

# 第6章　おわりに

中根遺跡から4軒の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡が検出された。花室川流域は該期の集落が希薄な地域のため、わずかでも資料の増加となり得た意義は大きい。

古墳時代前期の住居跡はいずれも隅丸方形を呈し、1・2号住居跡は縦長で3号住居跡は横長であった。周溝は2号住居跡にのみ見られた。柱穴は中根遺跡と同様に花室川右岸に位置する向原遺跡の例を見ると4本柱が主流であるが、本遺跡で確実に該当するのは2号住居跡だけであった。入り口部は向原遺跡では南東から南西方向にかけて集中しており、中根遺跡も同様であった。調査面積に対して住居跡がほとんど空白部なく配置されており、調査区外にわたっても広く住居跡が分布していたであろうことは十分に考えられる。

遺物は残念ながら住居跡の廃絶に伴いほとんどが持ち出されてしまっているが、3号住居跡より出土した壺は注目される。器形は胴部中位がやや潰れ気味に張り出し、ここを最大径としている。口縁部は外反して立ち上がり、比較的頸部からの立ち上がりが高くなっている。底径は口径よりやや小さく器形的には弥生後期の様相を色濃く残している。整形はヘラミガキとヘラナデで行われており、これら器形と整形の特徴から弥生時代後期と古墳時代前期の端境期に相当する土器と思われる。

本書が花室川流域の古代史の解明に少しでも役立つことができれば幸いである。

本書の作成にあたり多くの方々のご協力を得、ご指導、ご助言をいただきました。文末ながら厚く感謝の意を表します。

試掘状況

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | なかねいせき |
| 書名 | 中根遺跡 |
| 副書名 | 店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編者名 | 福田礼子　黒澤春彦　関口　満 |
| 著者名 | 福田礼子　黒澤春彦　加藤寛生 |
| 編集機関 | 土浦市遺跡調査会 |
| 発行機関 | 土浦市教育委員会 |
| 所在地 | 茨城県土浦市藤沢975 |
| 問合せ先 | 上高津貝塚ふるさと歴史の広場<br>〒300－0811　茨城県土浦市上高津1843　　TEL　029(826)7111 |
| 発行年月日 | 2009(平成21)年10月30日 |

| 所収遺跡 | 所在地 | コード | 北緯(新) | 東経(新) | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中根遺跡 | 茨城県土浦市右籾1641-2外 | 08203069 | 36° 2′ 36″ | 140° 11′ 12″ | 1997．3．25 ～4．10 | 300㎡ | 店舗建設事業に伴う発掘調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 中根遺跡 | 集落跡 | 弥生時代後期<br>古墳時代前期 | 竪穴住居跡1軒<br>竪穴住居跡3軒 | 弥生土器<br>土師器 | 弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡 |
| | 包蔵地 | 中世 | 溝2条 | 陶器 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 谷津の奥に立地する弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡。弥生土器は口縁部下端にイボ状突起を持つタイプで、当地域に特徴的な土器である。古墳時代の土器は赤彩された壺や、口縁部に輪積痕を残す甕、台付甕、小型高杯など古い様相がうかがえる。その後花室川下流域一帯に展開する古墳時代集落の先駆的な集落のひとつである。 |

# 写　真　図　版

調査前状況（北から）

調査終了全景（南から）

調査終了全景（北西から）

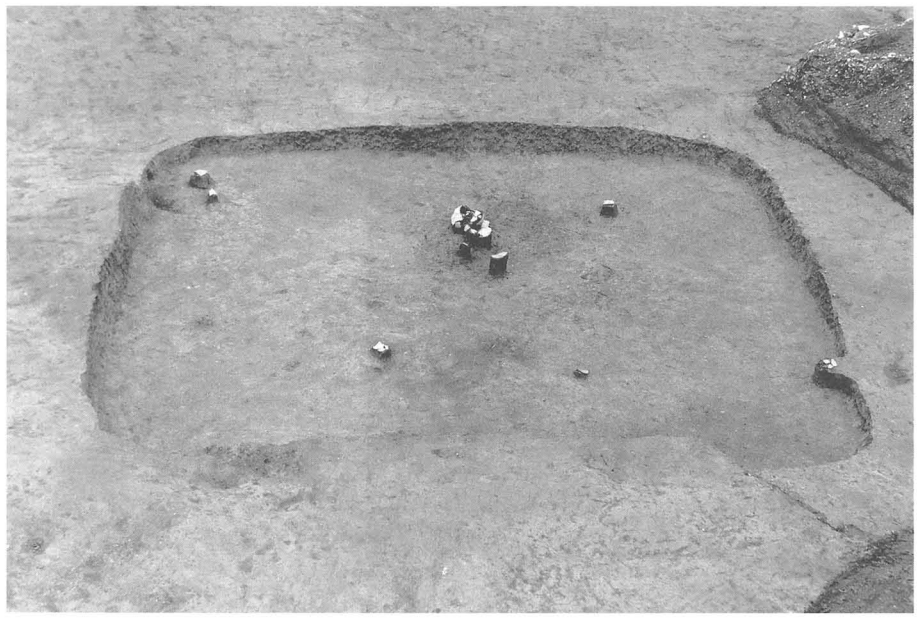
PL.2

1 号住居跡完掘

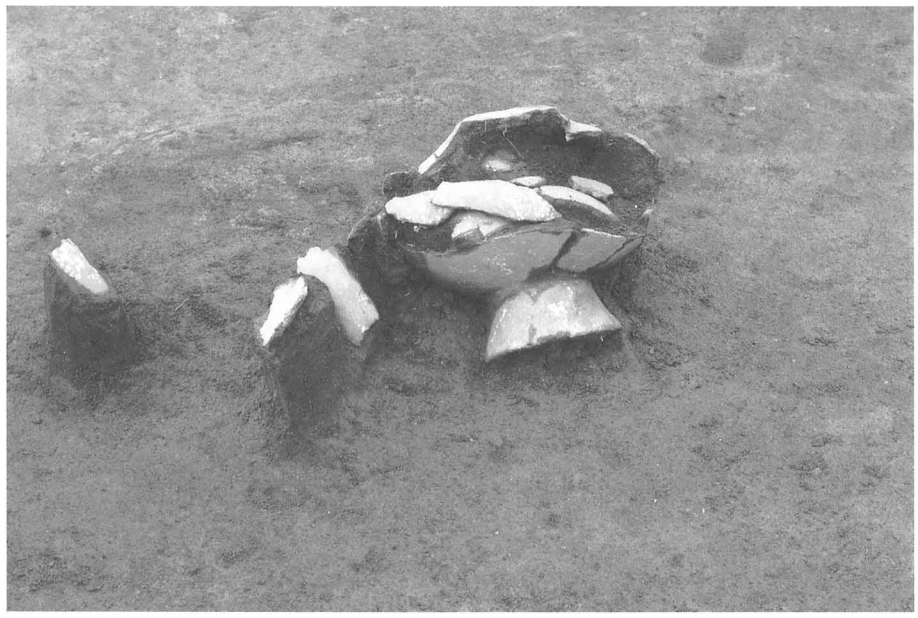
1 号住居跡遺物出土状況

2 号住居跡完掘

3 号住居跡完掘



3 号住居跡遺物出土状況

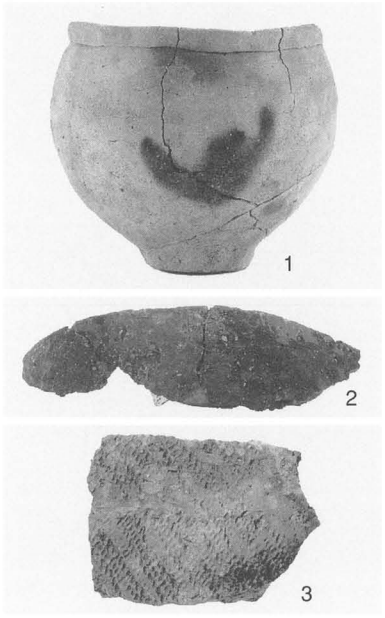


3 号住居跡遺物出土状況

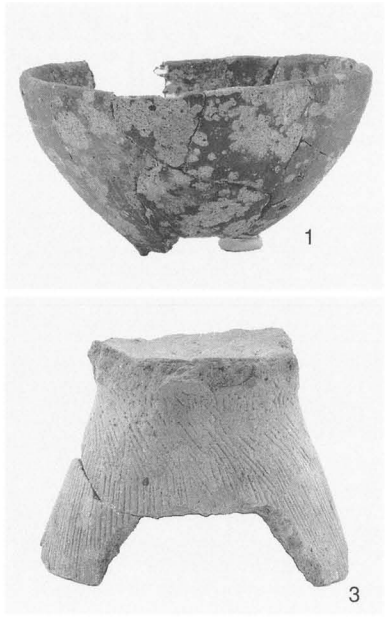
4 号住居跡完掘

1 号溝完掘

2 号溝完掘

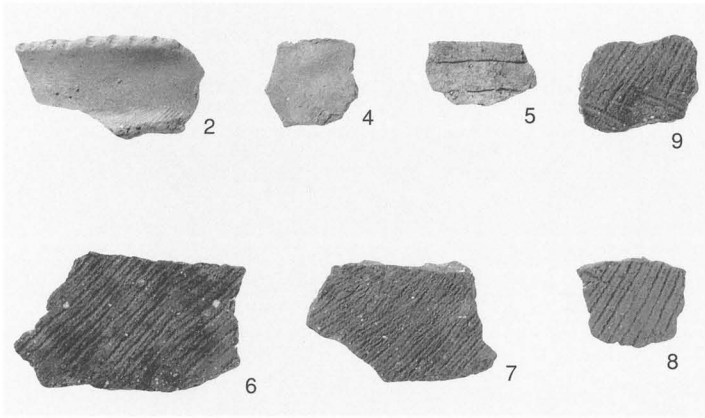



1 号住居跡

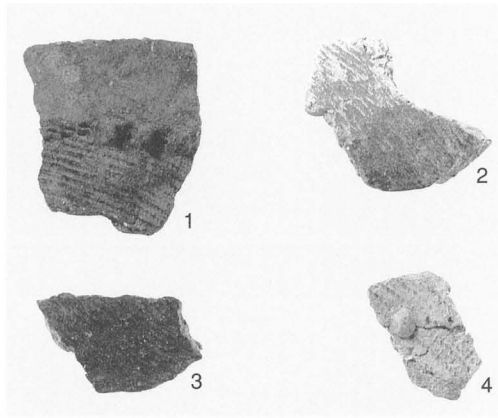



2 号住居跡

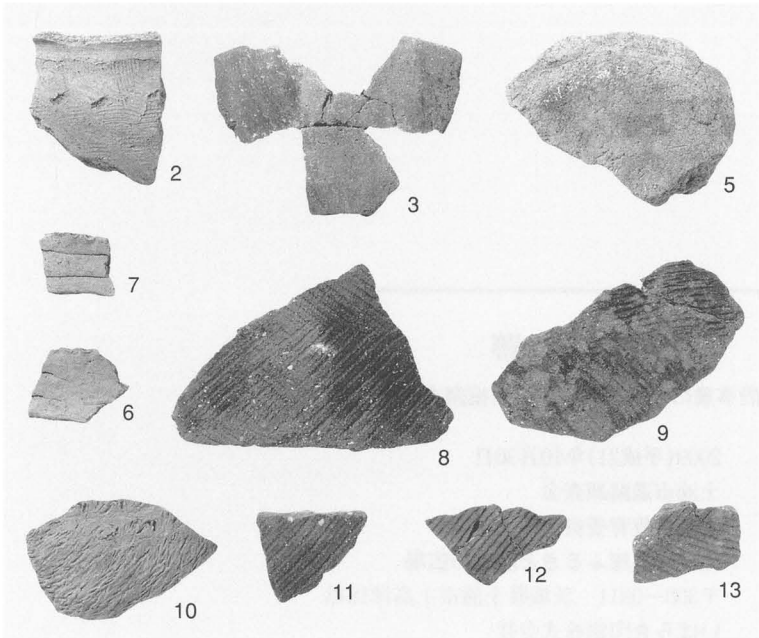
3 号住居跡



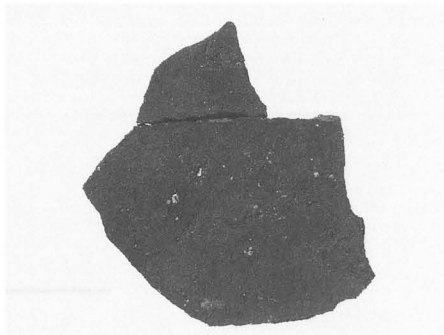

2 号住居跡



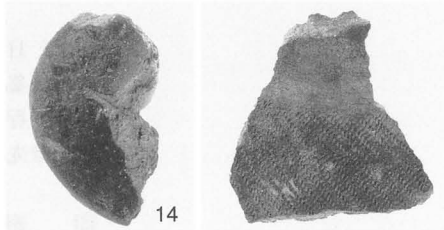

4 号住居跡




3 号住居跡



1 号溝




3 号住

遺構外

出土遺物

# 中根遺跡

－店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行日　2009(平成21)年10月30日
編　集　土浦市遺跡調査会
発　行　土浦市教育委員会
問合せ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300－0811　茨城県土浦市上高津1843
印　刷　いばらき印刷株式会社